福井県埋蔵文化財調査報告　第104集

菅谷烏帽子遺跡

―日野川等河川改修事業に伴う調査―

2009

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

菅谷烏帽子遺跡は、福井市街の西方に位置し、日野川と足羽川が合流する右岸の河川敷内に立地しています。

平成16年7月18日、嶺北地方は激しい豪雨に見舞われ、我々は、足羽川の決壊という未曾有の事態に遭遇しました。「福井豪雨」は激甚災害に指定され、河川改修事業を強力に押し進める原因となったことは周知のとおりです。

当時を顧みると、発掘調査の成果をようやく刊行することができたのは、災害に遭われても決してあきらめなかった多くの方々のおかげと感じています。

今回の調査では、弥生時代の墓と平安時代の東大寺の荘園、鳴野荘に関連すると考えられる掘立柱建物群が発見されましたが、角度を変えて見ると、各時代において、その営みは非常に短期間で終えているように思えます。おそらく過去の水害も幾たびかあったことを示しているのでしょう。そういう意味でも遺跡は、単なる昔のモノではなく、現在の私たちに向けられた、先人の声が織り込まれている資産だと思います。

今後、この調査の成果が広く公開、活用され、埋蔵文化財に対する理解をより一層深めていただくことになれば、幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、地元の皆様方からあたたかいご支援を賜りました。深く感謝いたします。

平成 21 年 3 月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長　吉岡泰英

例　　言

1　本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文に略）が、日野川等河川改修事業に伴い、平成5~6・17・18年度に実施した菅谷烏帽子遺跡（福井県福井市菅谷字烏帽子所在）の発掘調査報告書である。

2　菅谷烏帽子遺跡の調査は、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所の依頼を受けて、県埋文が実施した。発掘調査期間、遺物整理期間の担当者（役職名は当時）は下記のとおりである。出土遺物の整理作業は、県埋文にて実施した。

発掘調査期間

Ⅰ区　　平成６年２月23日~平成７年３月31日　主査 工藤俊樹、文化財調査員 中森敏晴

Ⅱ区　　平成17年７月２日~平成18年３月31日　主査 鈴木篤英、同 野路昌嗣

Ⅲ区　　平成18年４月２日~平成18年７月31日　主査 鈴木篤英

遺物整理期間

Ⅰ区　　平成７年４月２日~平成10年３月31日　文化財調査員 中森敏晴

Ⅱ・Ⅲ区　平成18年４月２日~平成21年３月10日　主任 冨山正明　同 鈴木篤英、主査 中森敏晴

3　本書の作成、編集は鈴木が行い、冨山、中森、嘱託調査員 石川敦子、同 水谷圭吾の協力を得た。

4　菅谷烏帽子遺跡に関するこれまでの成果発表にうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。

5　Ⅰ区の遺構写真撮影は工藤、Ⅱ区・Ⅲ区の遺構写真撮影とⅠ~Ⅲ区の遺物写真撮影は鈴木が行った。挿図の作成は第1・2章は鈴木が作成し、他の挿図については、鈴木、中森の指示のもと、第3章中の遺構挿図は株式会社イビソクが作成した。第4章中の遺物挿図中、土器については株式会社文化財サービスに委託して作成し、その他の遺物については水谷が作成した。木製品の樹種鑑定については株式会社吉田生物研究所に委託した。

6　本書に掲載した遺構全体図は、Ⅰ区を株式会社パスコ、Ⅱ区を株式会社帝国コンサルタントに委託して作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は、各区の航空測量時に撮影したものである。Ⅲ区は県埋文で測量杭を基に実測した。

7　遺物実測図、遺物観察表、図版第18~21中の番号は符号する。写真の縮尺は不同である。

8　本書における水糸レベルの表示は、海抜高(m)を示し、方位は地北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第Ⅳ系に基づく。

9　本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して県埋文で保管している。

10　発掘調査に際しては、下記の方々から協力を得た。

国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所　西藤島公民館（以上敬称略五十音順）

11　発掘調査ならびに本書の作成にあたり、下記の方々から指導・協力を得た。

中野拓郎（敦賀市教育委員会）　野原大輔（南砺市教育委員会）　的場茂晃（魚津市教育委員会）

水村伸行（一乗谷朝倉氏遺跡資料館）（以上敬称略五十音順）

12　発掘調査に際しては、地元の方々の参加、協力を得た。また、遺物整理作業は、県埋文の整理作業員があたった。

目　　次

頁

第1章　地理的・歴史的環境 …… 1
第1節　地理的環境 …… 1
第2節　歴史的環境 …… 2

第2章　調査の経緯と概要 …… 3
第1節　調査の経緯 …… 3
第2節　調査の概要 …… 6

第3章　遺　構 …… 7
第1節　Ⅰ区の遺構 …… 7
第2節　Ⅱ区の遺構 …… 8
第3節　Ⅲ区の遺構 …… 9

第4章　遺　物 …… 41
第1節　土　器 …… 41
第2節　その他の遺物 …… 59

第5章　まとめ …… 61
第1節　遺構・遺物のまとめ …… 61
第2節　8世紀の越前 …… 62

写真図版目次

本文対照頁

図版第1　遺　構
(1) 調査区遠景（南東から） …… 3・4
(2) 調査区遠景（西から） …… 3・4

図版第2　遺　構　Ⅰ・Ⅱ区
(1) Ⅰ区遠景（南から） …… 7・11・12
(2) Ⅱ区遠景（南から） …… 8・24

図版第3　遺　構　Ⅰ・Ⅱ区
(1) Ⅰ区遠景（西から） …… 7・11・12
(2) Ⅱ区遠景（西から） …… 8・24

図版第4　遺　構　Ⅰ区
(1) SH1（南西から） …… 7・11・13・37
(2) SB1（南東から） …… 7・11・13・37
(3) SB2（北東から） …… 7・12・14・37
(4) SB3（北西から） …… 7・11・15・37
(5) SB4（南東から） …… 7・11・37
(6) SB5（南東から） …… 7・11・16・37

図版第5　遺　構　Ⅰ区
(1) SB6（南東から） …… 7・11・17・37
(2) SB7（南東から） …… 7・11・18・37
(3) SB8（北東から） …… 7・12・17・37
(4) SB9・10（北東から） …… 7・12・19・37

(5) SL1、SW2、SK117・118、SD10（北東から）…… 7・8・12・22・37
(6) SK123（南西から）…… 12・22
(7) SL2・SK123・122（南西から）…… 8・12・23・37

図版第6　遺　構　Ⅰ区
(1) SW1（SL3）（北東から）…… 8・12・23・37
(2) SW1（SL3）井戸枠解体断面（北東から）…… 8・12・23・37

図版第7　遺　構　Ⅱ区
(1) C11X001遺物群（南から）…… 8・24・25・37
(2) SD6上面X004遺物群（南から）…… 8・24・25・38
(3) C3SD6付近X006遺物群（N010下面）（南から）…… 8・24・25・38
(4) C3 SD6付近X006遺物群（N01~9）（南から）…… 8・24・25・38
(5) D12P43上面遺物出土状況（北から）…… 8・24
(6) B10包含層遺物（南から）…… 8・24
(7) C4SD6付近X006遺物群（N010上面）（南から）…… 8・24・25・38

図版第8　遺　構　Ⅱ区
(1) SB3南東辺（南東から）…… 7・15・24・38
(2) SB12（南西から）…… 8・9・26・38
(3) SB13・14（南西から）…… 8・9・27・38
(4) SK1・2（南から）…… 9・24・28・38
(5) SK3（南から）…… 9・24・28・38
(6) SK4（南から）…… 9・24・28・38

図版第9　遺　構　Ⅱ区
(1) SK6・7（南から）…… 9・24・29・38
(2) SK6遺物出土状況（南から）…… 9・24・29・38
(3) SK19・20（東から）…… 9・24・30・38
(4) SK20遺物出土状況（南西から）…… 9・24・30・38
(5) SD5（北西から）…… 9・24・32・39
(6) SD6（南東から）…… 9・24・32・39

図版第10　遺　構　Ⅱ区
(1) SK15（南から）…… 9・24・30・38
(2) SK21（南から）…… 9・24・31・38
(3) SD6（南から）…… 9・24・32・39
(4) SD8（南西から）…… 9・24・32・39
(5) SD9（北西から）…… 9・24・32・39

図版第11　遺　構　Ⅲ区
(1) Ⅲ区遠景（南から）…… 9・10・33
(2) Ⅲ区遠景（北から）…… 9・10・33

図版第12　遺　構　Ⅲ区
(1) SK1（南東から）…… 10・33・34・39
(2) SK1（南西から）…… 10・33・34・39
(3) SK2（南東から）…… 10・33・34・39・39
(4) SK2（南西から）…… 10・33・34・39
(5) SK3（南東から）…… 10・33・34・39
(6) SK5（南西から）…… 10・33・35・39
(7) SK6（南から）…… 10・33・35・39

図版第13　遺　構　Ⅲ区
(1) SB16（P1~5）（南西から） …… 10・33・35・39
(2) SD5内D28X002（南から）…… 10・33・35・39
(3) SD5内D28X003・004（南から） …… 10・33・35・40
(4) G34X005（南から）…… 9・33・35・40
(5) SD6内X006（南から） …… 10・33・35・40

図版第14　遺　物　土器
Ⅰ区包含層出土遺物　須恵器 …… 41・45・51・52

図版第15　遺　物　土器
Ⅰ区包含層出土遺物　須恵器 …… 41・45・51・52
Ⅱ・Ⅲ区包含層出土遺物　須恵器 …… 43・44・46・53・54

図版第16　遺　物　土器
Ⅱ・Ⅲ区包含層出土遺物　須恵器 …… 43・44・46・53・54
Ⅱ・Ⅲ区包含層出土遺物　土師器 …… 42・43・47・54

図版第17　遺　物　土器
Ⅰ～Ⅲ区包含層出土遺物　土師器、弥生土器 …… 42・47・54・55
Ⅰ区遺構出土遺物　須恵器 …… 42・43・48・55・56

図版第18　遺　物　土器
Ⅰ区遺構出土遺物　須恵器 …… 42・43・48・55・56
Ⅰ区遺構出土遺物　土師器、弥生土器 …… 42・43・49・56・57

図版第19　遺　物　土器
Ⅰ区遺構出土遺物　弥生土器 …… 43・49・57
Ⅱ・Ⅲ区遺構出土遺物　須恵器、土師器 …… 43・44・57・58

図版第20　遺　物　土器
Ⅱ・Ⅲ区遺構出土遺物　土師器、弥生土器 …… 43・44・50

図版第21　遺　物　その他の遺物
(1) 玉作り関連遺物 …… 59・60
(2) 石鏃・石錐 …… 59・60
(3) 石鏃・石錐 …… 59・60
(4) Ⅰ区SW1井戸枠板材 …… 8・59

挿図目次

頁
第１図　福井市周辺の地形図 …… 1
第２図　菅谷島帽子遺跡周辺の遺跡分布図 …… 2
第３図　調査区位置図 …… 3
第４図　調査区と周辺の地形図 …… 4
第５図　発掘調査風景 …… 6
第６図　調査区全体図 …… 10
第７図　Ⅰ区遺構全体図（1） …… 11
第８図　Ⅰ区遺構全体図（2） …… 12
第９図　Ⅰ区SH1、SB1 …… 13
第10図　Ⅰ区SB2 …… 14
第11図　Ⅰ区SB3 …… 15
第12図　Ⅰ区SB5 …… 16

第13図　Ⅰ区SB6・8 …… 17
第14図　Ⅰ区SB7 …… 18
第15図　Ⅰ区SB9 …… 19
第16図　Ⅰ区SB10 …… 20
第17図　Ⅰ区SB11 …… 21
第18図　Ⅰ区SK119・121~123・125、SL2、SL1、SW2 …… 22
第19図　Ⅰ区SW1（SL3）、SD5 …… 23
第20図　Ⅱ区遺構全体図 …… 24
第21図　Ⅱ区S29~31、X001~005遺物群 …… 25
第22図　Ⅱ区SB12 …… 26
第23図　Ⅱ区SB13・14 …… 27
第24図　Ⅱ区SK1~5 …… 28
第25図　Ⅱ区SK6・7・9・10・11・13 …… 29
第26図　Ⅱ区SK12・14・15~17・19・20 …… 30
第27図　Ⅱ区SK21・22、SD1・4 …… 31
第28図　Ⅱ区S8・38・37、SD6・8・9 …… 32
第29図　Ⅲ区遺構全体図 …… 33
第30図　Ⅲ区SK1~3 …… 34
第31図　Ⅲ区SK4~6、SB15（P1~5）、S4・6~9・11、S1、SD5、G34X005 …… 35
第32図　Ⅲ区S2・3・5・13・14 …… 36
第33図　Ⅰ区包含層出土　須恵器 …… 45
第34図　Ⅱ・Ⅲ区包含層出土　須恵器 …… 46
第35図　Ⅰ~Ⅲ区包含層出土　土師器、弥生土器 …… 47
第36図　Ⅰ区遺構出土　須恵器 …… 48
第37図　Ⅰ区遺構出土　土師器、弥生土器 …… 49
第38図　Ⅱ区・Ⅲ区遺構出土　須恵器、土師器、弥生土器 …… 50
第39図　玉作り関連遺物、石鏃、石錐 …… 59
第40図　石庖丁、不明石器、土錘 …… 60

表　目　次

頁
第１表　主要遺構一覧表 …… 37
第２表　土器観察表 …… 51
第３表　その他の遺物観察表 …… 60

第１章　地理的･歴史的環境

第１節　地理的環境（第１図）

日本海に面した福井県の嶺北地方は、沖積平野と山塊からなる地形であり、九頭竜川下流域には坂井平野、足羽川流域には福井平野、日野川流域には武生・鯖江盆地が形成されている。

県の中心部である福井平野は、九頭竜川、足羽川、日野川の三河川によって形成された総合的な沖積平野といってもよく、東方の越前中央山地と西方の丹生山地の間に挟まれた福井断層の凹地に、河川堆積物が流れこんで形成されたと考えられている。

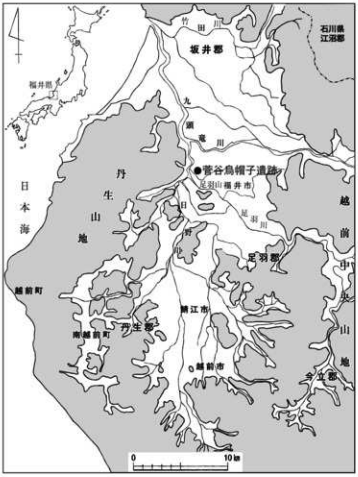
福井平野は、越前中央山地、丹生山地に挟まれながらも、これらの山麓に洪積世台地や緩傾斜地が形成されず、平野南部に島状の独立丘陵が点在していることが特徴であり、河川が扇状地を残さず、堆積地に大きな比高差がないため、福井平野や坂井平野は全体が徐々に沈む「沈降地形」である可能性が指摘されている（第1図）。

福井市街の西側では、国見山山塊に沿って日野川が北に流れ、東方か流れる足羽川が市街を通過した後、これに合流している。菅谷島帽子遺跡は、福井市中心街から北西へ約3km離れた、この日野川と足羽川の合流点に位置し、日野川右岸の河川敷内に立地している。通常、河川外の自然堤防上には多くの遺跡が認められるが、河川敷内は工事を受けていたり、水流によって遺構面が流失しているので、遺跡が確認されることは稀である。

菅谷島帽子遺跡の有無については、足羽川は本来、遺跡南方の加茂河原町から角折町を蛇行して、国見山山塊に沿って流れる日野川と合流していた河川であって、現在の合流点は、菅谷町、大瀬町を人工的に開削して築いた経緯があった。

河川の付け替え工事は明治33年、昭和4~6年、昭和26年に行われ、旧足羽川は昭和38年の時点で完全に埋め立てられたようである。

以上の点を踏まえると、旧地形における菅谷島帽子遺跡は、国見山塊の裾を流れる日野川からやや距離をおいた微高地に展開していたと考えられ、中心部の大半は合流点の掘削工事によって消失したものの、調査部分に関しては包含層の削平だけで済んだようである。



第1図　嶺北地方の地形図（縮尺1：400,000）

第２節　歴史的環境（第2図）

番号	県番号	遺跡名	番号	県番号	遺跡名	番号	県番号	遺跡名
1	01124	菅谷烏帽子遺跡	10	01082	安竹遺跡	19	01126	地蔵堂遺跡
2	01119	北堀貝塚	11	01083	土橋遺跡	20	01127	菅谷西野遺跡
3	史12	北堀貝塚	12	01084	上伏遺跡	21	01129	三ッ屋遺跡
4	01076	中角遺跡	13	01085	舟橋新遺跡	22	01130	西堀遺跡
5	01069	四十谷古墳群	14	01086	新田塚遺跡	23	01128	三郎丸遺跡
6	01070	深谷古墳	15	01087	新田塚三ッ屋遺跡	24	01123	大瀬仙光坊館
7	01144	東大寺領道守荘	16	01131	里別所遺跡	25	01122	下市遺跡
8	01074	河合勝見遺跡	17	01132	八ヶ島遺跡	26	01121	安居城
9	01081	黒丸遺跡	18	01125	三ッ屋古川遺跡	27	01146	東下野遺跡

第2図　菅谷烏帽子遺跡周辺の遺跡分布図（縮尺1：50,000）

日野川は九頭竜川を介して、日本海の三国湊と平野部を結ぶ物資や交通の伝達路であった。そのため、右岸の自然堤防上には集落遺跡が数多く展開し、左岸においては国見岳の山塊中腹に古墳群が密集して存在している。ここでは、発掘調査によって実体が明らかになった周辺の主要な遺跡の概観を述べる。

北堀貝塚（第2図2・3）（文1・4）は大正2年（1913）に発見され、日野川と未更毛川が合流する地点に位置する。縄文時代早期末の縄文・条痕文系土器と前期の土器等が採集され、昭和29年（1954）に県史跡に指定された。昭和62年（1987）から平成2年（1990）に県埋文がボーリング調査を行い、遺跡の範囲が従来より大規模であることが確認された。

中角遺跡（第2図4）（文2）は、九頭龍川右岸に立地し、南北500m、東西700mの広がりを有している。平成7年（1995）から県埋文が調査した結果、下層面が弥生~古墳時代、上層面が平安~中世の遺構で構成される複合遺跡であることが判明した。遺構は、方形周溝墓3基、掘立柱建物数棟、土壙墓30基以上が検出されている。遺物は、弥生時代中期~古墳時代の土器、石器、鉄製品、管玉、ガラス小玉が検出されている。

東大寺領道守荘（第2図7）（文3・4）

市街地西南、社地区に展開する奈良時代、東大寺領最大の荘園である。天平神護2年（766）の開田図が正倉院に伝えられ、「越前国司解」に34町6段64歩の面積を有していたとされる。昭和37~41年（1962~1966）、昭和58~62年（1983~1987）に福井市教育委員会により調査が行われた。

参考文献
1．工藤俊樹『北掘貝塚』福井県埋蔵文化財調査センター所報4　福井県埋蔵文化財調査センター　1991 年
2．中森敏晴『中角遺跡』『第12回発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1997年
3．福井県『福井県史』資料編13考古　1986年
4．福井市『福井市史』資料編1考古　1990年

第２章　調査の経緯と概要

第１節　調査の経緯

Ⅰ．調査の経緯

調査は、「日野川等河川改修工事」に伴う発掘調査である。福井市の西方、足羽川と日野川の合流点は、川幅が狭く、高低差も小さいため水ハケが悪く、一度、豪雨になると、たびたび市街に水害を引き起こしてきた。そのため、合流点の川幅の拡張と浚渫は、長らく課題となっていた。

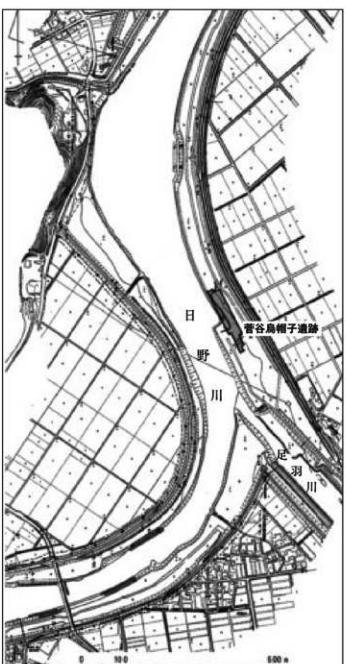
菅谷烏帽子遺跡は、日野川の河川敷内に立地するが、現在の合流点が近代になって開削されたこと、東大寺の荘園である「鳴野荘」が存在したこと、左岸に北掘貝塚が存在することなどが考慮され、平成4年8月、同年10月、同年12月に遺構の有無、規模を把握すべく試掘調査を実施した。

試掘の結果、弥生時代中~後期、奈良~平安時代の集落遺跡が存在していることが確認され、国土交通省（旧建設省）側から示された事業予定地において、調査が必要とされる面積は4,900㎡と算出された。これを受けて、国土交通省（旧建設省）から、「遺跡発見通知」（平成4年8月5日付け建近福井調第42号文書）が提出された。

発掘調査は、Ⅰ区から着手し、平成5年度は1,650㎡、平成6年度は2,450㎡、平成7年度は800㎡の面積を調査した。

平成7年度の調査終了後、国土交通省（旧建設省）と県文化課との協議の結果、足羽川の拡張工事よりも、まず、九頭竜川の堤防付け替え工事に伴う「中角遺跡」の発掘調査が優先されたため、中角遺跡の調査を平成7年6月から平成16年12月まで継続的に行うこととなった。

平成16年7月18日未明、嶺北地方一帯は、一晩で250㎜以上の降雨を記録した「福井豪雨」に見舞われ、足羽川の堤防は決壊し、福井市街が泥流に侵されるという事態に至った。福井豪雨は、国から激甚災害として特定され、急遽、足羽川の拡張工事を予定を繰

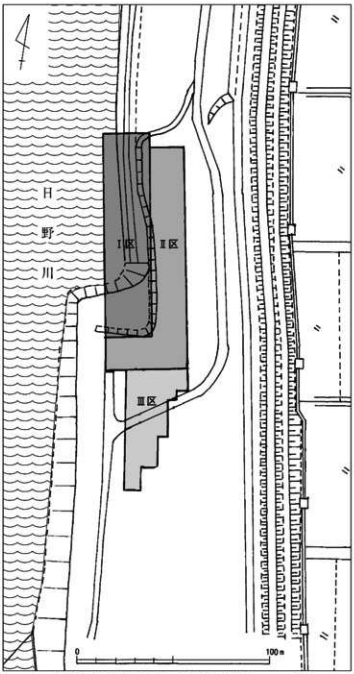


第3図　調査区位置図（縮尺1：10,000）

り上げて行うことになった。国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所と県文化課は協議を行い、平成7年度以降、一時停止していた菅谷烏帽子遺跡の発掘調査を、平成17年7月から再開することで合意した。平成17年度は、平成5~7年度調査区の東側に隣接した区域、2,200㎡の面積を調査対象とし、平成18年度は、平成17年度調査区の南方側、1,200㎡の面積を調査対象とした。

Ⅱ. 調査の方法

調査区については、平成7年度以前の調査区をⅠ区、平成17年度の調査区をⅡ区、平成18年度の調査区をⅢ区とした(第4図)。調査の方法は、河川敷き内の雑木の伐採、重機による表土剥ぎを国土交通省側で実施した後、調査区内に5m間隔の大グリットを設定する基本測量を行い、これを遺構の実測や遺物を採り上げる基準として用いた。調査はⅠ区から着手し、以降、Ⅰ区で設定した任意グリットを東方と南方へ拡張する形で、Ⅱ区、Ⅲ区の調査に着手した。最終的に、調査区全体にかけて、東から西へA~I、北から南へ1~37の番号を付した。



第4図　調査区と周辺の地形図（縮尺1：2,000）

遺構については、掘立柱建物はSB、柱穴や小穴はP、土坑もしくは土坑墓はSK、大形土坑はSL、溝はSD、井戸はSW、土器集中地点にはX、遺構断面観察地点にはSの略記号を用いた。

遺構番号は原則的に調査区ごとに区切って番号を付したが、掘立柱建物に関しては、遺跡の最も主要な遺構であり、煩雑さを避けるため、遺物整理作業の段階でⅠⅡⅢ区を通して、改めて番号を付け直した。

図面については、遺物を伴う遺構実測図は縮尺1/10で作成し、遺構全体の略側図は縮尺1/50で作成した。遺構断面図は、縮尺1/20で作成し、土層の記述は、『新版標準土色帖(2001年度版)』に準拠した。

遺構全体測量図は、Ⅰ区については、基本測量から航空写真測量までを㈱パスコ、Ⅱ区については、基本測量を㈱イビソク、航空写真測量を㈱帝国コンサルタントに委託して、遺構検出時に作成した実測図と照合して作成した。Ⅲ区は、遺構密度が薄いことが想定されたので、遺構全体図に関しては、測量杭を基準にして実測図を作成した。

写真については、4×5版、6×9版、35㎜版のモノクロ、スライド、ネガフィルムで撮影し、各々、写真台帳を作成して記録した。

第２節　調査の概要

Ⅰ．調査の概要

菅谷烏帽子遺跡は、日野川と足羽川の合流点右岸に位置し、河川敷内に立地している。発掘調査は平成5~7・17・18年度に実施し、弥生時代中期、奈良・平安時代の集落遺跡であることが判明した。

『越前国司解』の天平神護2年(766)10月21日の記載事項から、一帯は、かって、鳴野(しぬの)村と呼ばれ、東大寺領鳴野(しぬの)荘の荘園が置かれていた記録が残っている。同記載の「西北六条十一菅江里」、「西北六条十二菅江西里」の「菅江」は、現在の「菅谷」の集落に近接し、「高岸田」という地名は、現在の三郎丸の「高木」「西高木」「東高木」に通じているのではないかと考えられる。

発掘調査は、平成5~7年度の調査区2,900㎡をⅠ区、平成17年度の調査区2,200㎡をⅡ区、平成18年度の調査区1,200㎡をⅢ区とし、合計6,300㎡を調査した。検出した主な遺構は、掘立柱建物16棟、竪穴住居1棟、土坑24基、土坑墓3基　溝20条、井戸2基である。掘立柱建物は、規格性のある配置から倉庫群であった可能性が高く、建物群と同時期に構築された井戸には蒸籠状に組まれた堅牢な井戸枠が設置されていた。溝は、建物群に関連した区画溝と考えられる。土坑は、長楕円形のもの、不定形なものを確認し、これらは弥生時代中期の土器片を含んでおり、長楕円形のものは土坑墓と考えられる。

Ⅱ．調査日誌

平成５年度　Ⅰ区
２月17日　表土剥ぎ開始。
２月23日　Ⅰ区調査開始。
３月29日　E・F11でSH1検出。

平成６年度　Ⅰ区
６月２日　D・E・F2でSD5検出。
７月11日　空中写真測量。
11月４日　E・F・G18~19精査。SW1・2検出。

平成７年度　Ⅰ区
４月18日　空中写真測量。
４月24日　SW1解体。表土剥ぎ開始。Ⅰ区調査終了。

平成17年度　Ⅱ区
７月４日　Ⅱ区調査開始。排水路、包含層掘削。
７月15日　Ⅲ区の調査範囲を確定させるため、再試掘を開始。
７月20日　C12P43の直上で須恵器長頸壺、C3SD6直上で須恵器の集中区、X006遺物群を確認。
７月27日　猛暑が続く。台風7号関東へ上陸。避難したペルコンや器材を再設置。
８月１日　吉野堀遺跡から作業員4名追加。
８月２日　猛暑が続き、作業員1人熱中症となる。
８月５日　包含層除去ほぼ終了。B10包含層から須恵器、土師器多く出土。
８月30日　SK6から弥生土器出土。SD1~4精細。
９月６日　台風14号接近。器材を仮撤去。
９月13日　砺波市教委野原氏来跡。SK1~3精査。S5~8実測完了。
９月15日　嘱託調査員岡田、西本見学。S18実測。
10月６日　C3SD6上X006とB6X002、B10の包含層で須恵器の遺物群を検出。
10月13日　A~D13~18包含層除去完了。遺構精査開始。A~D19~24包含層除去開始。
11月１日　SD9、C11X001、C2X003、C2X004、C1X005、C11X001遺物群精査。
11月17日　SB10・11精査。Ⅲ区表土剥ぎ開始。
11月21日　I~E22~24遺構精査開始。
11月31日　全体会議後職員見学会。
12月６日　SK19・20・21精査
12月９日　3日間大雪となる。プレハブ圧壊防止の除雪。航空写真測量は3月に延期。
１月13日　除雪。12月の遅れた作業を行う。
３月３日　航空写真測量のため全体再精査。
３月28日　航空写真測量終了。

平成18年度　Ⅲ区
４月６日　Ⅲ区調査開始。排水路、包含層掘削。
４月27日　D~F25~33包含層除去完了。
５月12日　SD1~4、SK1精査。
５月17日　SD5~7、SK1・2精査。D~F34~39包含層除去開始。
６月１日　SK1・2完掘。実測。精査。D~F34~39包含層除去開始。　６月６日　C24~27、G25~33を追加して拡張。
６月12日　SD5から須恵器蓋出土。X002遺物群精査。C25包含層から石鏃1点出土。帝国コンサルタントによる基本測量杭に不備あり。打ち直しを要請。
６月27日　SD10精査。G34X005遺物群、P1~4精査。
７月18日　4日間の豪雨により日野川の水位が上がり現場は水没。足羽川に洪水警報。
７月25日　水害による泥をほぼ除去。全体撮影の準備。
７月26日　SB1、SK5・6、X003・004遺物群、遺構全体撮影完了。
７月28日　器材清掃後、搬出。Ⅲ区調査終了。

第5図　発掘調査風景

第3章　遺　　構

第1節　Ⅰ区の遺構（第6~19図、図版第4~6、第1表）

・層　位

Ⅰ区の調査面積は4,900㎡である。厚さ約50㎝の表土を除去すると、調査区全面にわたって厚さ20~40㎝の包含層の堆積が確認された。包含層は粘性を持たない褐灰色砂質土である。包含層には、弥生時代中期の土器と奈良~平安時代の須恵器・土師器が含まれ、遺物量はコンテナパット15箱未満であった。土器以外の遺物では、玉作り関連遺物、石器等が検出された。

・遺　構（第7・8図、図版第2・3）

遺構検出面は、標高5.0m前後に位置する褐色土の地山面で確認することができたが、検出した遺構はいずれも深度が浅く、本来の遺構面は少なくとも30㎝以上上であったと推定される。主要な遺構は竪穴住居1棟、掘立柱建物11棟、土坑132基、井戸2基、溝11条がある。

竪穴住居

竪穴住居のSH1（第9図、図版第4）は、主軸を北東－南西間にとり、長軸4.70 m×短軸2.70mを測る。主柱穴はなく、北東の短辺に出入口が設けられ、住居の周囲に壁溝がめぐる。

掘立柱建物

掘立柱建物は、ほとんどのものが建物の主軸を南東－北西間にとり、柱穴の断面は、柱が引き抜かれた後に埋没した様相を呈していた。形状と規模から、長方形の小型タイプ（SB1）、中型タイプ（SB8・9・10）、大型タイプ（SB2・3）のものと、方形の小型タイプ（SB6・11）、中型タイプ（SB5・7）に分けられる。

長方形の小型タイプであるSB1（第9図、図版第4）は、桁行1間×梁行1間の規模で、4.70×2.70mの広さを有している。P1~P3間とP2~Ｐ4間には柱穴が存在していた可能性が高い。中型タイプであるSB8（第13図、図版第5）は、桁行3間×梁行2間の規模で、5.60×3.50（推定）mの広さを有している。柱穴の形状は不整円形であり、柱の直径は約15㎝前後と考えられる。SB9（第15図、図版第5）は、桁行4間×梁行2間の規模で、7.40×4.80mの広さを有している。柱穴の形状は不整方形である。東辺柱列に建て替えの痕が窺える。SB10（第16図、図版第5）は、桁行4間×梁行3間の規模で、7.00×5.60mの広さを有している。柱穴の形状は不整方形である。大型タイプであるSB2（第10図、図版第4）は、桁行5間×梁行3間の規模で10.20×5.40mの広さを有している。西側柱列の柱穴P2から須恵器の杯蓋が出土している。SB3（第13図、図版第5）は、Ⅰ区とⅡ区にまたがり、桁行4間×梁行3間を測り、9.00×6.00mの広さを有している。柱穴の形状は方形である。

方形の中型タイプであるSB5（第12図、図版第4）は、桁行2間×梁行2間の規模で、5.30×5.00mの広さを有す。SB7（第14図、図版第5）は、桁行3間×梁行2間の規模で、4.20×4.00mの広さを有す。小型タイプであるSB6（第13図、図版第5）は、桁行2間×梁行2間の規模で、3.60×3.30mの広さを有す。SB11（第17図）は桁行1間×梁行1間の規模で3.30×3.00mの広さを有す。

土坑

SL1（第18図、図版第5）は、黄灰色砂質土の地山を大きく掘り込んだ不定形の土坑であり、4.80×3.20mの規模を有す。SW2が重複しており、両者の前後関係を確認すべく土層を観察したが、SL1は

SW2と同一遺構であると判断するに至った。SL1とSW2の遺物は混在し、須恵器杯、土師器甕が検出されている。SL2(第18図、図版第5)はSL1の南側に近接し、2.00×1.80mの規模を有す。深さは1m近く掘り込まれ、須恵器短頸壺蓋、杯B、杯Aが検出されている。SW2 と同様な形態であることから、これらは途中で掘削を中止した井戸ではないかと考えられる。

井戸

SW1(第19図、図版第6)は、SL3と重複している井戸である。SW1の形状は漏斗状であり、径が長軸2.85m、短軸2.70m、深さ2.15mの規模を測る。井戸枠は、土圧による崩壊を防ぐため、補強した後、調査に着手した。実測図や図版において井戸枠下層で縦方向になっている板は補強材である。

井戸枠を構成する板材は、長辺約1.25m、短辺約0.15m、厚さ約2cmを測り、長辺に切り込み入れて、蒸籠状に9~10段の高さまで組まれていた。井戸枠の底面には、泥溜用の曲物などは据えず、7枚の板材を長辺に沿って並べて敷き、それらの小口面を揃えた一方に、もう1枚の板材直交して加え、平坦な正方形の板敷き面を構えていた。井桁解体時に採り上げた板材は計48枚を数え、木目が緻密で良質の堅い板材(図版第21)であった。板材の材質は、樹種鑑定の結果、全てスギと判明した。井戸底からは須恵器杯B蓋、壺、台付長頸瓶が検出された。

第2節　Ⅱ区の遺構（第20~28図、図版第7~10、第1表）

・層　位（第21図）

Ⅱ区の調査面積は2,200㎡であり、Ⅰ区の東側に隣接する。厚さ約50cmの表土を除去すると、厚さ20~40cmの包含層の堆積が確認された。包含層は粘性を持たない褐灰色砂質土であった。包含層中の遺物は、Ⅰ区と同様に、弥生時代中期の土器と奈良・平安時代の須恵器・土師器が含まれ、遺物量はコンテナバット30箱未満であった。その他の遺物としては、玉作り関連遺物、石器が若干数確認された。

X001~006遺物群は、包含層中において、特に遺物がまとまって検出された地点である。C11 X001遺物群(第21図、図版第7)は、SB12の柱穴縁に位置し、弥生時代後期の甕が縦半身に割れて1個体分が検出された。D9X002遺物群(第21図)は、P30の直上で検出された弥生時代中期の甕である。B6X003遺物群は弥生時代後期の有段口縁をもつ鉢1個体分の土器である。D2・3X004遺物群(第21図、図版第7)とC1X005遺物群(第21図)は、土師器のまとまりである。C3X006遺物群(第21図、図版第7)は、SD6の直上で検出され、採集番号No1~9までの大部分は須恵器大甕の破片であり、大型平瓶も検出された。C3X006遺物群の内、No10上面(第21図、図版第7)は弥生時代後期の甕と高杯の破片であり、これを除くと、上面で検出した甕の縦半身の破片(第21図)が確認された。

・遺　構（第20図、図版第2・3）

遺構検出面は、標高5.0m前後に位置する褐色土の地山面で確認することができた。Ⅰ区と同様、遺構面は少なくとも30cm以上上であったと推定される。主要な遺構として掘立柱建物5棟、土坑22基、溝10条(第20図、図版第2・3)が検出された。

掘立柱建物

掘立柱建物は、Ⅰ区と同様に、建物の主軸を南東－北西間にとり、柱穴断面の観察では、柱は、すべて引き抜かれていた。建物は形状と規模から、長方形の小型タイプ(SB14)、中型タイプ(SB12・13)に分けられる。

長方形の小型タイプであるSB14(第23図、図版第8)は、旧Ⅱ区SB12に相当し、桁行2間×梁行1間の規模で、5.00×3.20mの広さを有している。東辺柱列と西辺柱列から須恵器・土師器片が検出されている。

中型タイプであるSB12(第22図、図版第8)は、旧Ⅱ区SB8に相当し、桁行4間×梁行2間の規模で、6.50×4.30mの広さを有している。東辺柱列P21・5と西辺柱列P15・14・13・2、北辺柱列P6から須恵器・土師器片が検出されている。SB13(第23図、図版第8)は、旧Ⅱ区SB11に相当し、桁行4間×梁行3間の規模で、8.00×5.00mの広さを有している。西辺柱列P45・69・53・52・51、北辺柱列P44、南辺柱列P55・49から須恵器・土師器片が検出されている。SB15(第20図)はC8・9で検出され、Ⅰ区SB1と同様な長方形の小型タイプの掘立柱建物と考えられる。Ⅱ区D9~11で検出されたSB3については、Ⅰ区の遺構で前述したとおりである。

土坑

土坑はSK1~22を検出した。SK1~15までは黄灰色砂質土の地山を掘り込み、SK16~21は暗青灰色粘質土の地山を掘り込んでいた。規模は2.0m前後、深さは40cm前後のものが多い。

平安時代以降の土坑は、SK1・2・10・11・13・14である。SK1(第24図、図版第8)はSK2を切り、須恵器杯B蓋、杯Aが検出され、SK2(第24図、図版第8)からは須恵器杯B蓋、土師器椀Aが検出されている。切り合い関係から、SK10とSK13はSB13に後続して掘られ、SK11はSB14に後続する。

弥生時代の土坑は、SK4・6・7・15(第26図、図版第10) ・19・20・22である。SK4(第24図、図版第8)・6(第25図、図版第9)は楕円形を呈し、弥生時代中期の甕が検出されている。SK6は掘り込みが深く、底面が平坦であることから土坑墓と考えられる。隣接するSK7(第25図、図版第9)も同時期の土器片を含み、その可能性が高い。同様な土坑墓配置は、SK20(第26図、図版第9)、SK19(第26図、図版第9)でも見られ、長方形の形状を呈し、弥生土器の壺、甕等を含むSK20には、SK19が付随していた。SK22は不定楕円形の土坑であり、弥生時代後期の無頸壺を含んでいた。

溝

SD1はⅠ区から続く遺構であり、断面はV字状となり、深さは0.95mを測る。全長5m程の長さで立ち上がり、方形周溝墓の周溝ではないかと考えたが、確証は得られなかった。SD4・8は、幅広く浅い溝であり、須恵器、土師器を含んでいた。SD9は、正確には溝ではなく、複数の土坑が連続して切り合ったものと判断され、弥生時代中期の壺を含んでいた。SD2・5(第28図、図版第9)・6(第28図、図版第9・10)・10は、溝の幅は1m前後で狭く、深さ20~50cmを有す。SD2と5が直交する同一遺構とであることが判明しており、全体的に見ると、掘立柱建物群全体を囲む区画溝ではないかと考える。

第3節 Ⅲ区の遺構 (第29~32図、図版第11~13、第1表)

・層 位 (第32図)

Ⅲ区の調査面積は1,200㎡であり、Ⅱ区の南側に隣接する。厚さ約50cmの表土を除去すると、厚さ5~20cmの包含層の堆積が確認された。包含層は褐灰色砂質土であった。包含層中の遺物は稀薄であり、奈良~平安時代の須恵器・土師器が若干含まれていた。遺物量はコンテナバット10箱未満であった。

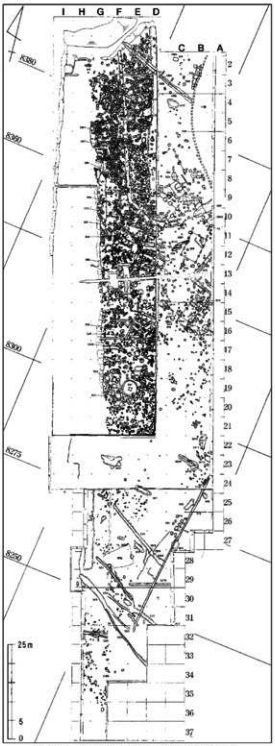
包含層中からは、G34X005遺物群(第31図、図版第13)が、弥生時代後期の土器のまとまりとして、地山面から30cm上の高さで検出された。

・遺　構（第29図、図版第11）

遺構検出面は、標高5.0m前後に位置する褐色土、または、暗青灰色粘質土の地山面で確認することができた。主要な遺構として掘立柱建物1棟、土坑6基、溝10条（第29図、図版第11）がある。

掘立柱建物

SB16（第31図、図版第13）は、P1~5で構成され、方形の柱列が確認されたが、建物以外の構造物の可能性がある。主軸は南東－北西間にとり、柱は、すべて引き抜かれている様相を呈していた。



第6図　調査区全体図（縮尺1：1,000）

土坑

土坑はSK1~6を検出した。SK1~3までは黄灰色砂質土の地山を掘り込み、SK4~6は暗青灰色粘質土の地山を掘り込んでいた。SK1~3・5は弥生時代中期の土坑墓と考えられる。

SK1（第30図、図版第12）は、不整長方形で長軸4.6m、短軸1.7mを測り、下層の黒褐色の堆積土から弥生時代中期の土器片と不明石製品2点が検出された。

SK2（第30図、図版第12）は、不整長方形で長軸3.20m、短軸1.10mを測り、下層の黒褐色の堆積土から弥生時代中期の土器片と炭化材が検出された。炭化材は、通常ならば、箱形木棺が腐朽して、土中で炭化したと見られるが、炭化材を上・中・下層の3層に分けて面的に検出し、厚さ、木目方向や傾き、出土位置を検討すると、当初から炭化した材を数枚用いて、被葬者を覆っていた可能性も考えられる。

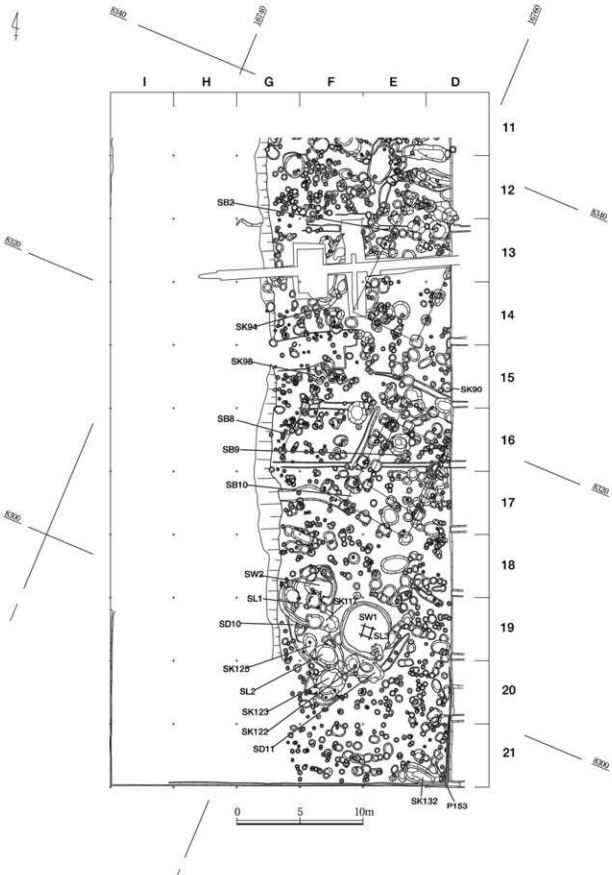
SK3（第30図、図版第12）は、不整長方形で長軸1.90m、短軸0.50mを測り、遺物は確認できなかったが、小児用の土坑墓と考えられる。SK5（第30図、図版第12）は、不整長方形で長軸3.30m、短軸1.10mを測る。遺物は確認できなかったが土坑墓の可能性がある。

溝

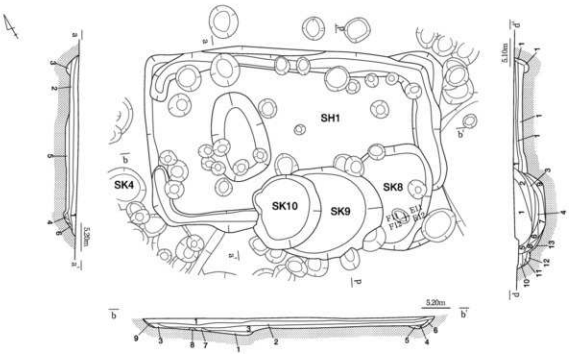
SD1~3・5・6・8は、北西から南東に伸びる浅い溝である。堆積土と出土遺物から、これらの溝は平安時代以降のものと考えられ、SD5以外は自然流路である。

SD5は、溝中からX002~004遺物群（第31図、図版第13）として平安時代の土師器甕が検出されている。SD6からはX006遺物群（図版第13）として須恵器椀が検出されている。SD8においても須恵器椀が検出されている。SD10（第29・31図版第2）は、Ⅱ区から南西へ直線的に伸びる溝であり、全長47m、上幅0.45m、深さ0.65mを測り、掘立柱建物群の区画溝と考えられる。

第7図　Ⅰ区遺構全体図（1）（縮尺1：300）



第8図　Ⅰ区遺構全体図（2）（縮尺1：300）



SH1a-a'層位

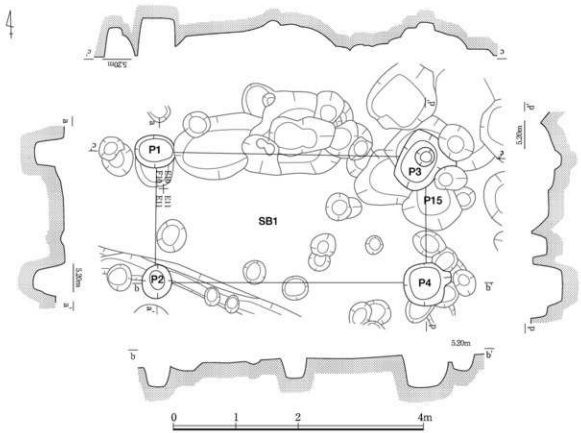
1 茶褐色 粘質土
2 茶褐色 粘質土
3 茶褐色 粘質土
4 茶褐色 粘質土
5 黄褐色 粘質土
6 黄褐色 粘質土

SH1b-b'層位

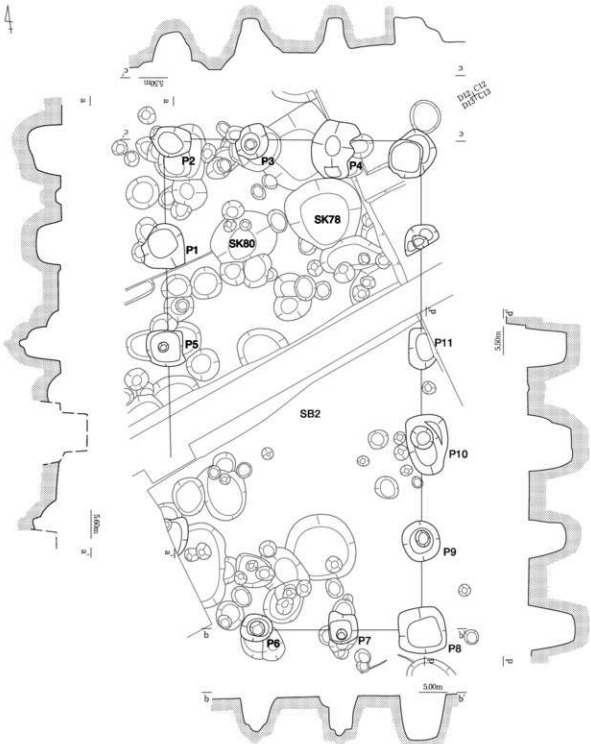
1 茶褐色 粘質土
2 茶褐色 粘質土
3 茶褐色 粘質土
4 茶褐色 粘質土
5 黄褐色 粘質土
6 黄褐色 粘質土
7 黄褐色 粘質土
8 黄褐色 粘質土
9 黄褐色 粘質土
10 黄褐色 粘質土

SH1c-c'層位

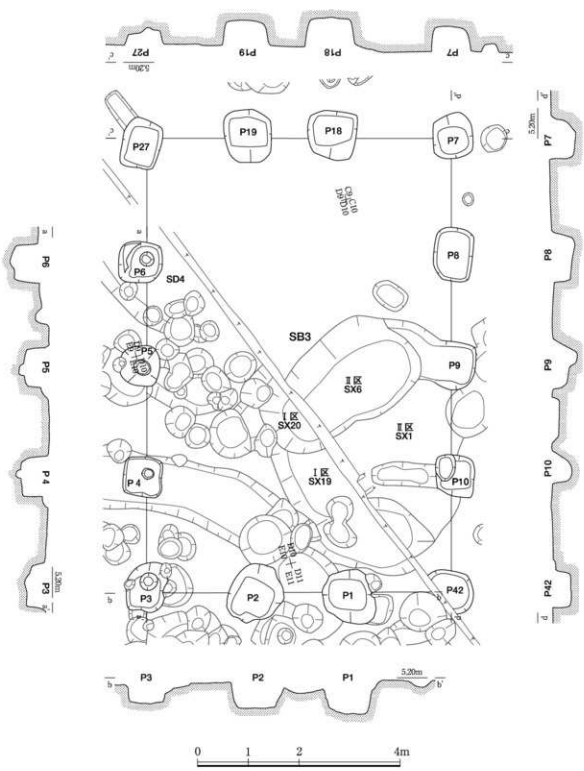
1 茶褐色 粘質土
2 茶褐色 粘質土
3 茶褐色 粘質土
4 茶褐色 粘質土
5 茶褐色 粘質土
6 茶褐色 粘質土
7 茶褐色 粘質土
8 茶褐色 粘質土
9 黄褐色 粘質土
10 黄褐色 粘質土
11 黄褐色 粘質土
12 黄褐色 粘質土
13 黄褐色 粘質土
14 茶褐色 粘質土
15 茶褐色 粘質土
13 茶褐色 粘質土
14 黄褐色 粘質土
15 黄褐色 粘質土



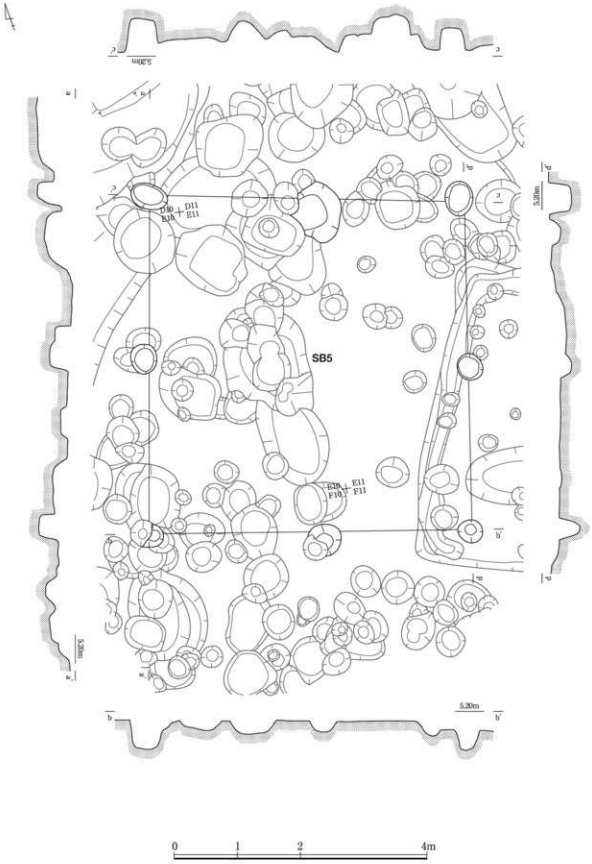
第9図　Ⅰ区SH1、SB1（縮尺1：60）



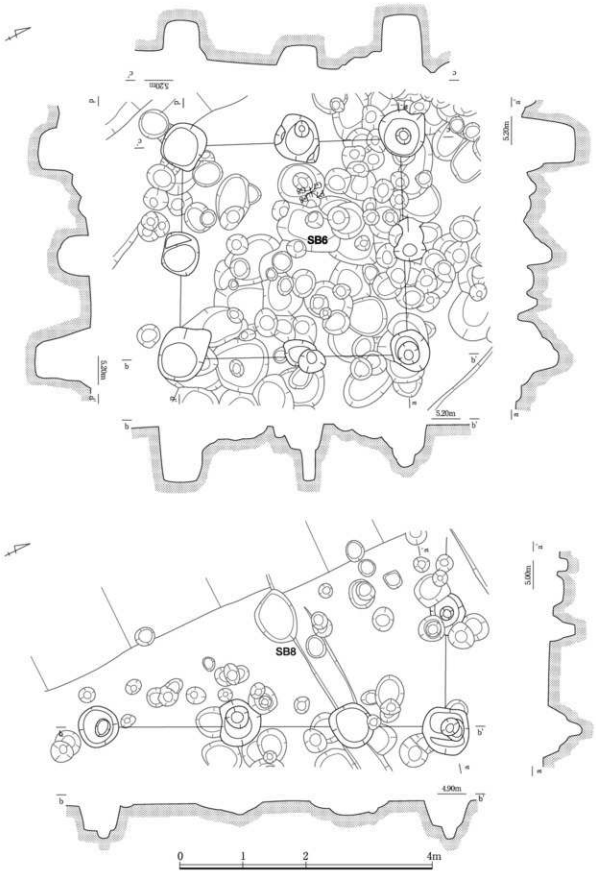
第10図　Ⅰ区SB2（縮尺1：80）



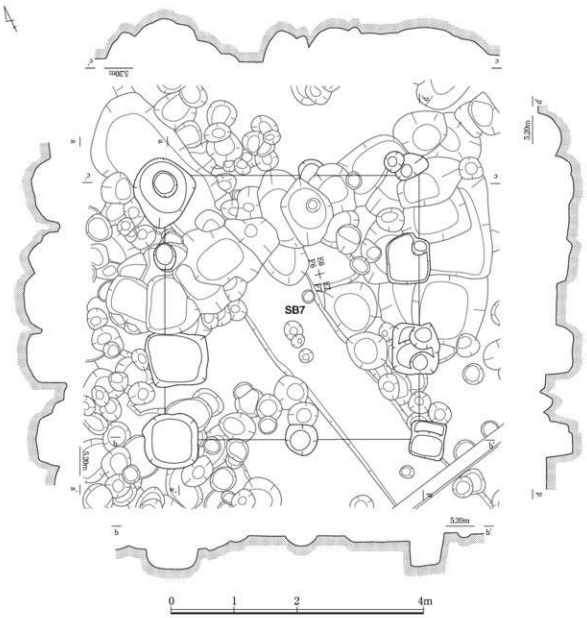
第11図　Ⅰ区SB3（縮尺1：80）



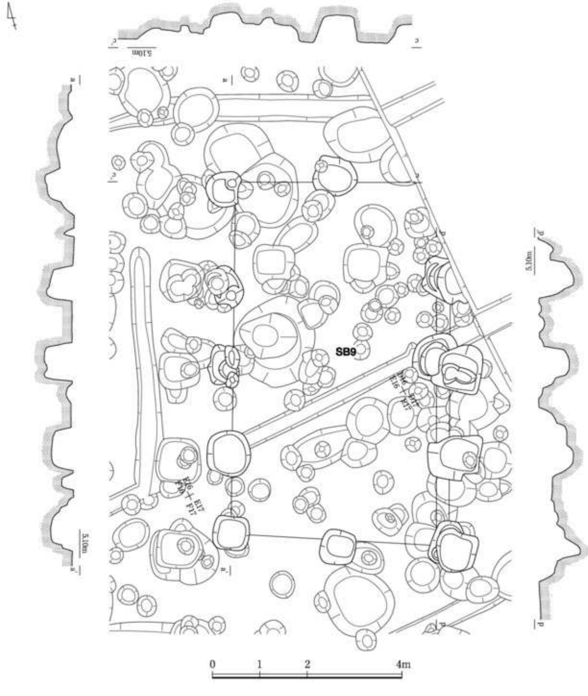
第12図　Ⅰ区SB5（縮尺1：60）



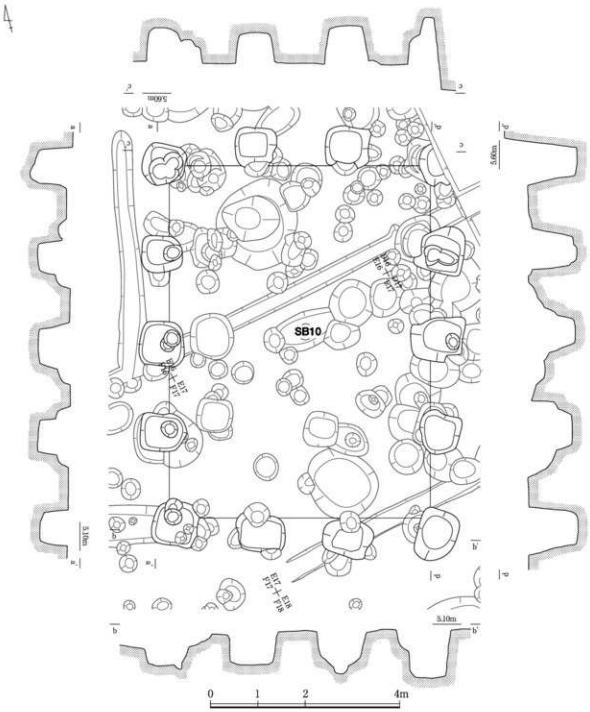
第13図　Ⅰ区SB6・8（縮尺1：60）



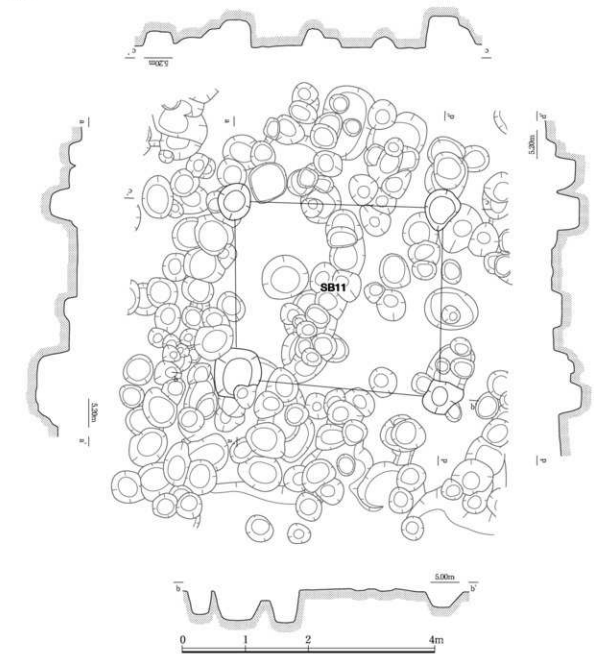
第14図　Ⅰ区SB7（縮尺1：60）



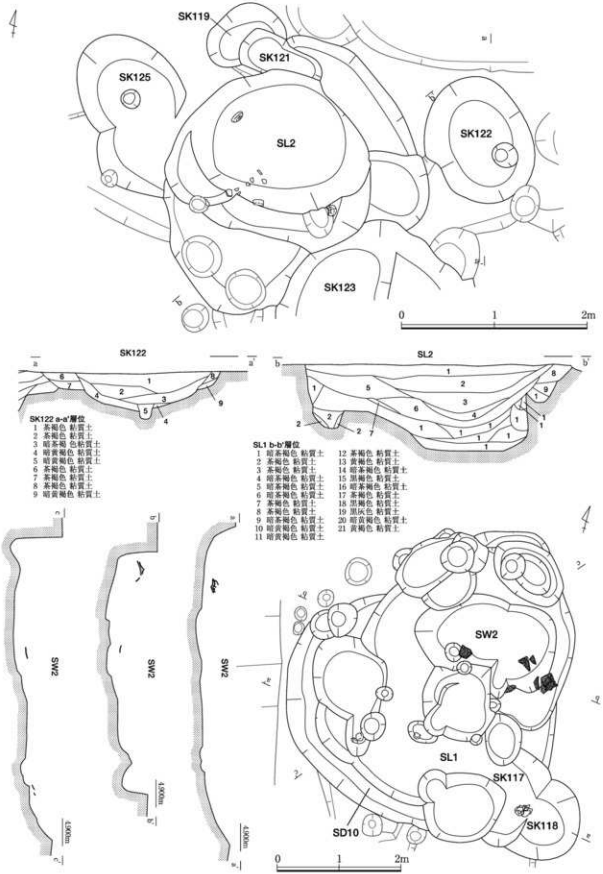
第15図　Ⅰ区SB9（縮尺1：80）



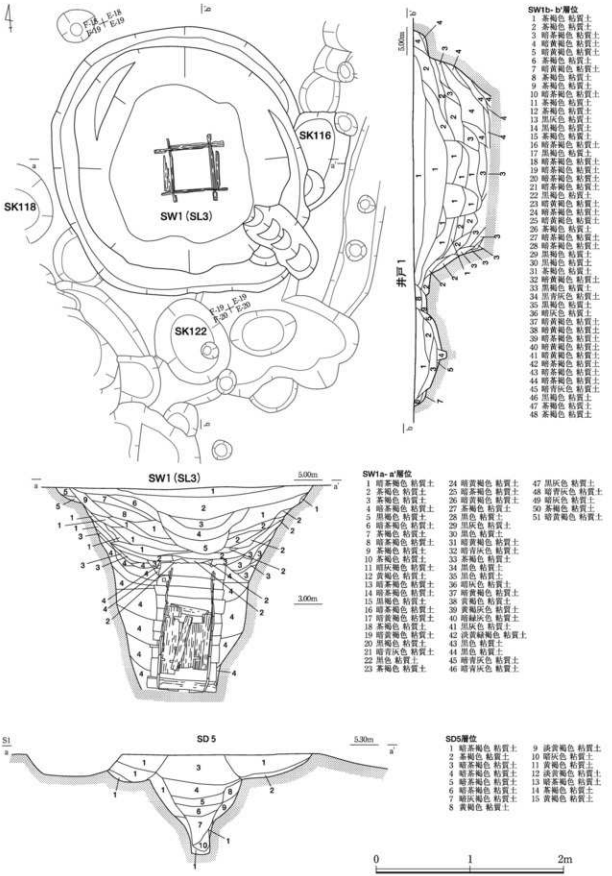
第16図　Ⅰ区SB10（縮尺1：80）



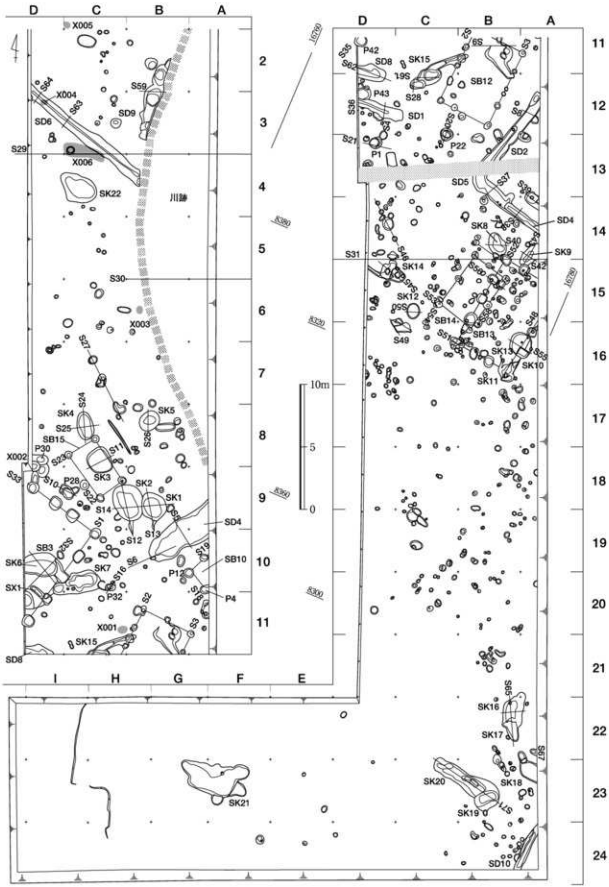
第17図　Ⅰ区SB11（縮尺1：60）



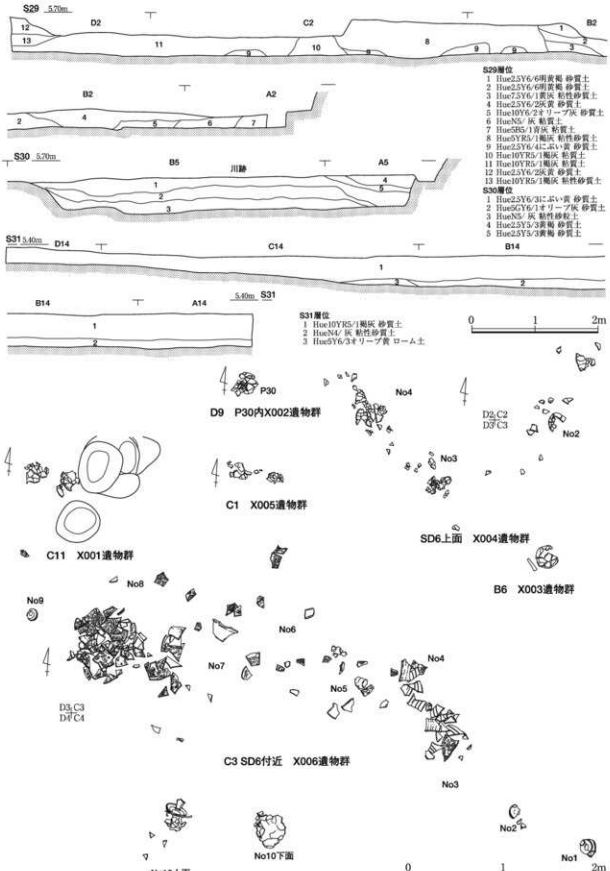
第18図　Ⅰ区SK119・121~123・125、SL2（縮尺1：40）、SW2、SL1（縮尺1：60）



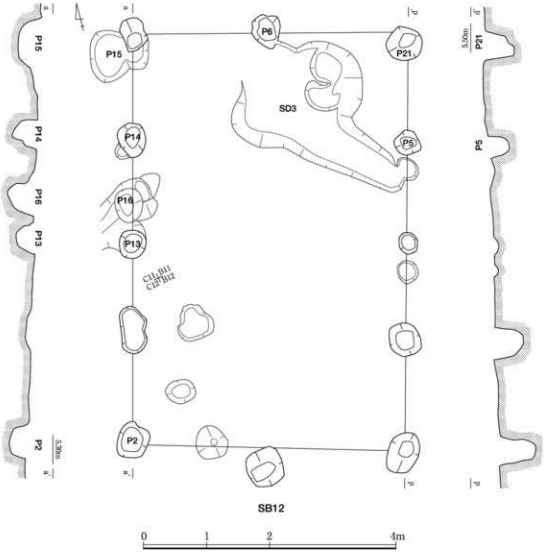
第19図　Ⅰ区SW1（SL3）、SD5（縮尺1：40）



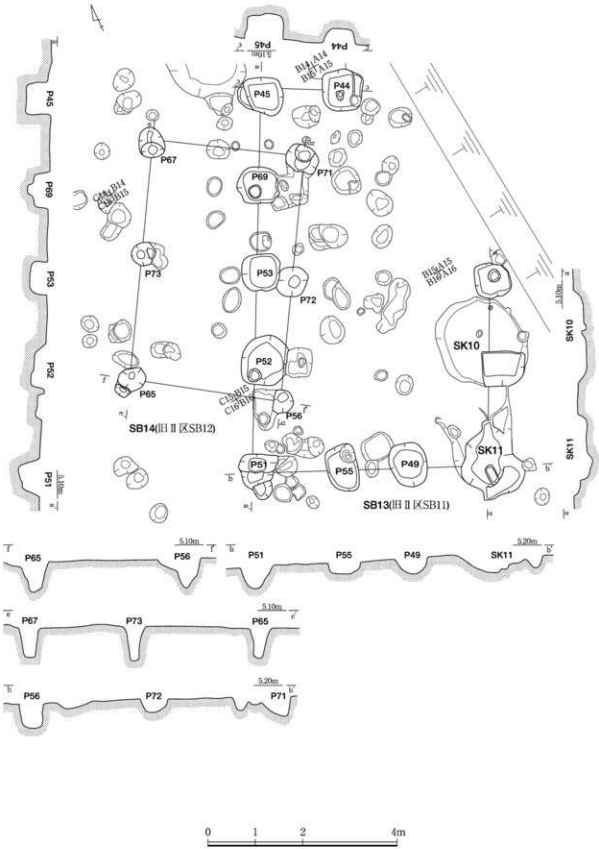
第20図　Ⅱ区遺構全体図（縮尺1：300）



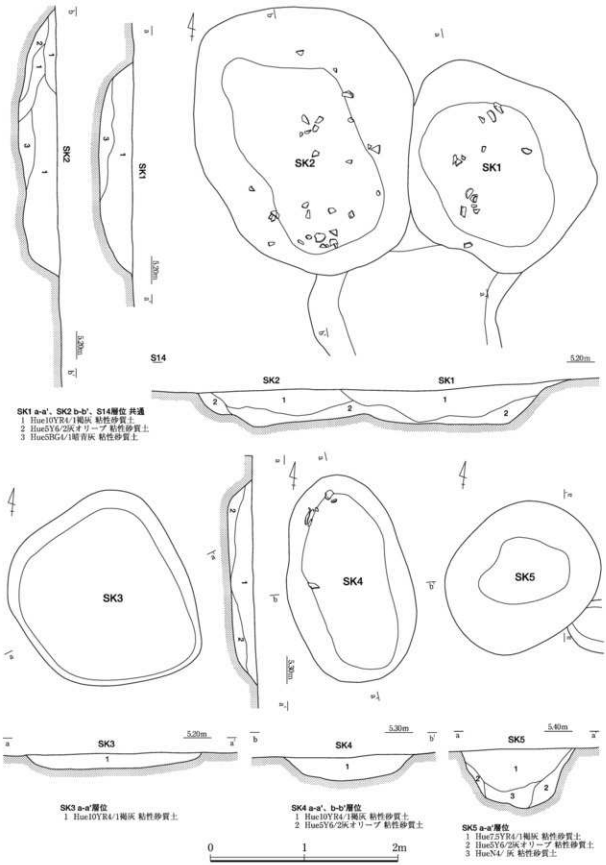
第21図 Ⅱ区S29~31（縮尺1：60）、X001~005遺物群（縮尺1：40）



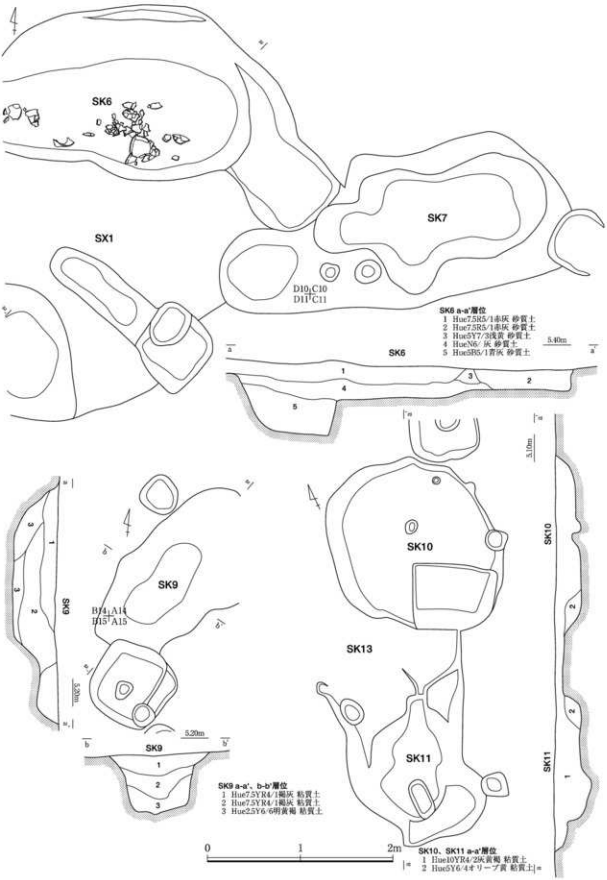
第22図　Ⅱ区SB12（縮尺1：60）



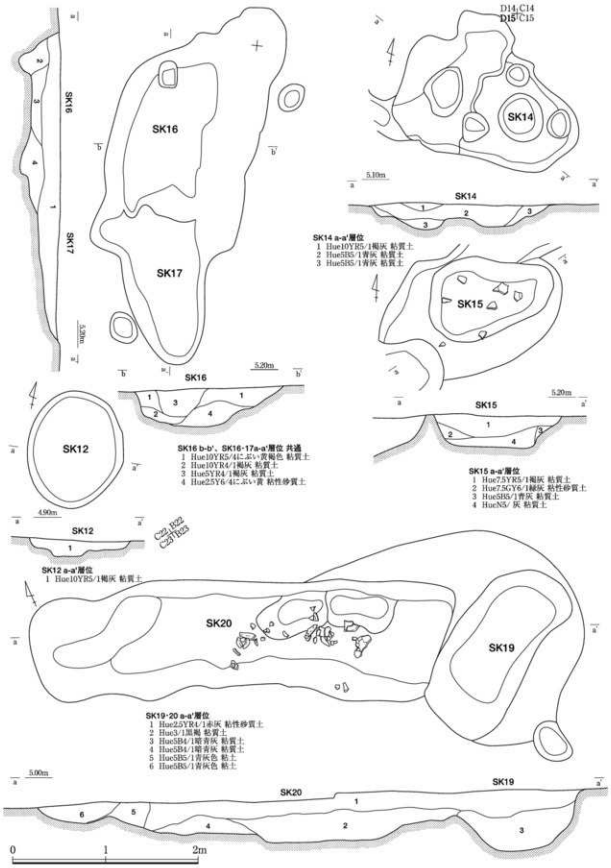
第23図　Ⅱ区SB13・14（縮尺1：80）



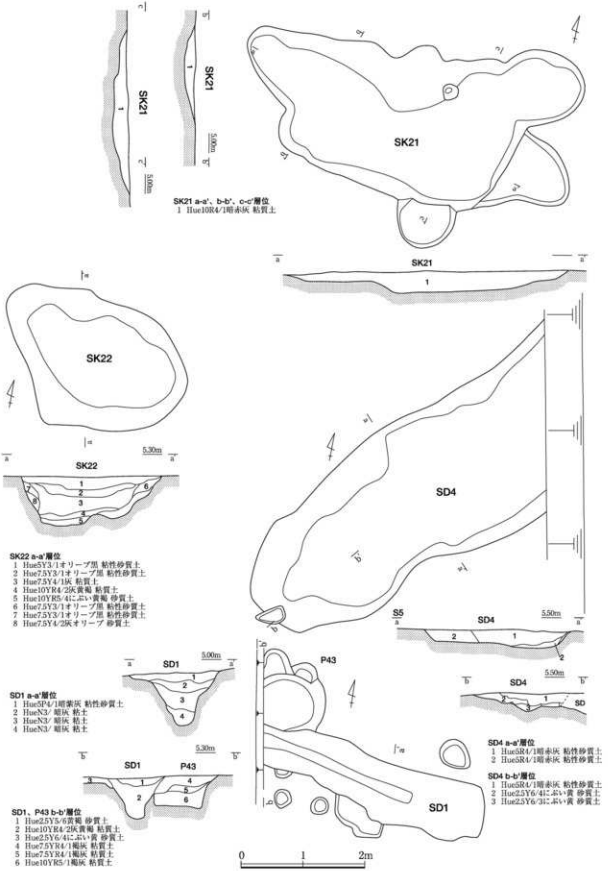
第24図　Ⅱ区SK1~5（縮尺1：40）



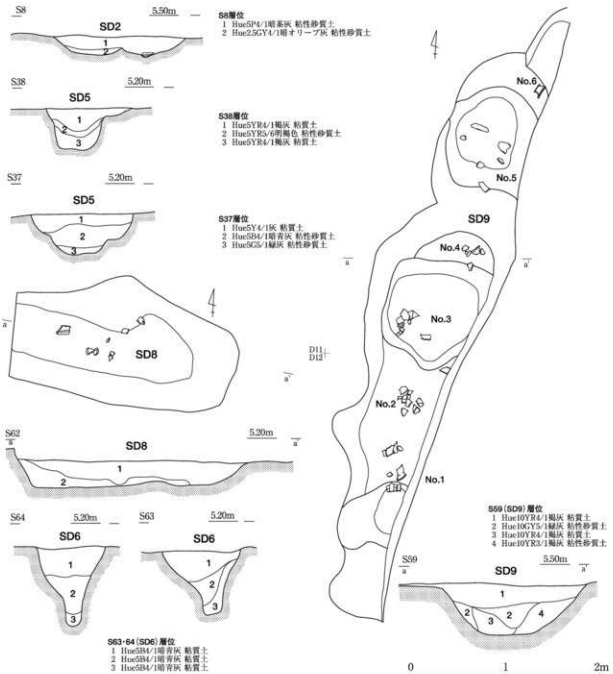
第25図　Ⅱ区SK6・7・9・10・11・13（縮尺1：40）



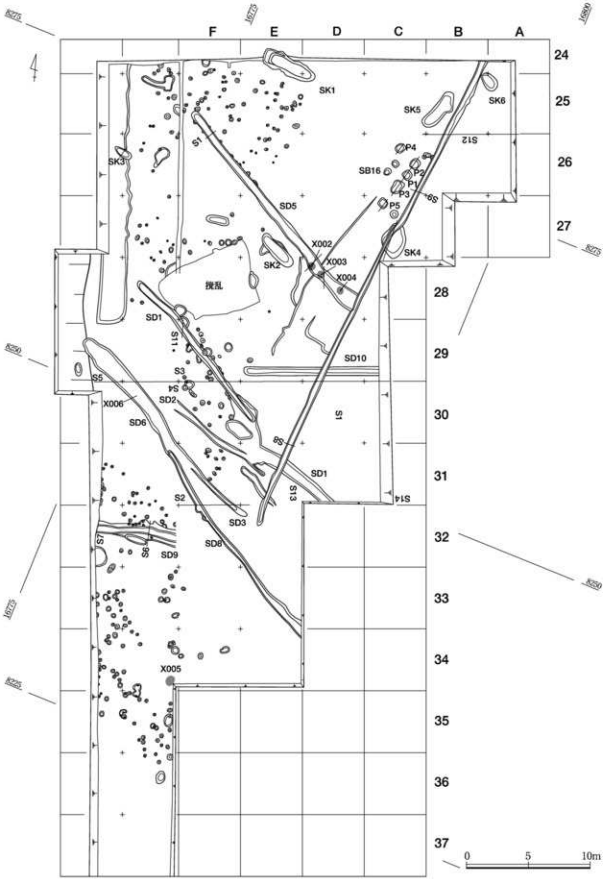
第26図　Ⅱ区SK12・14・15~17・19・20（縮尺1：40）



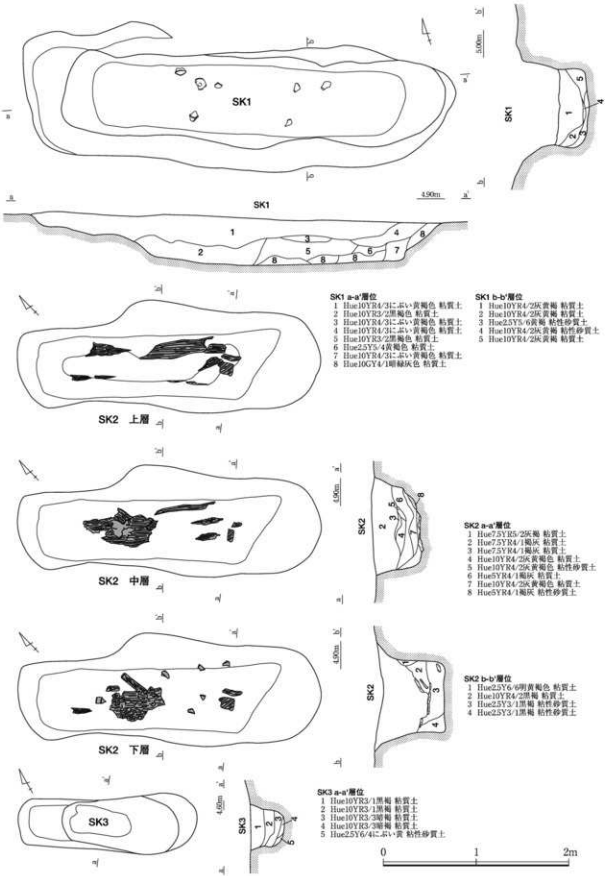
第27図　Ⅱ区SK21・22、SD1・4（縮尺1：60）



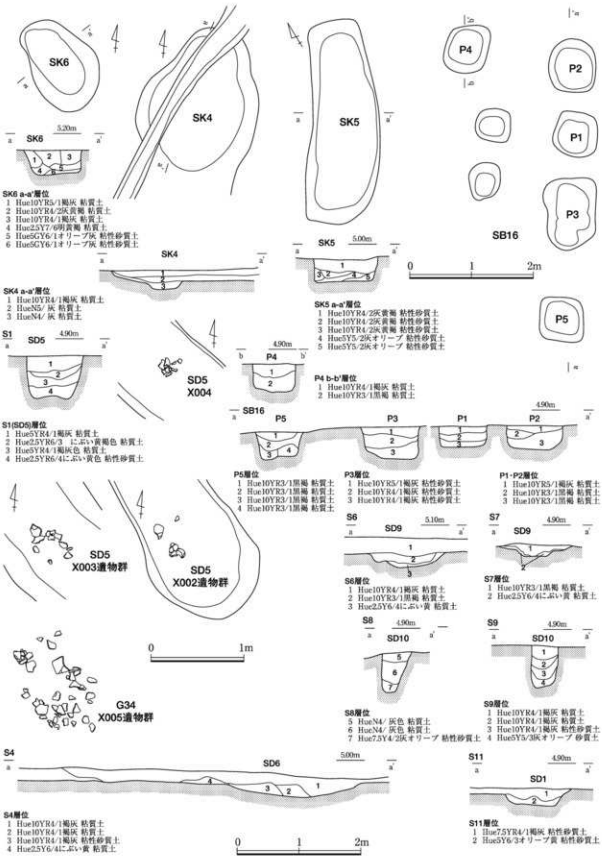
第28図　Ⅱ区S8・38・37、SD6・8・9（縮尺1：40）



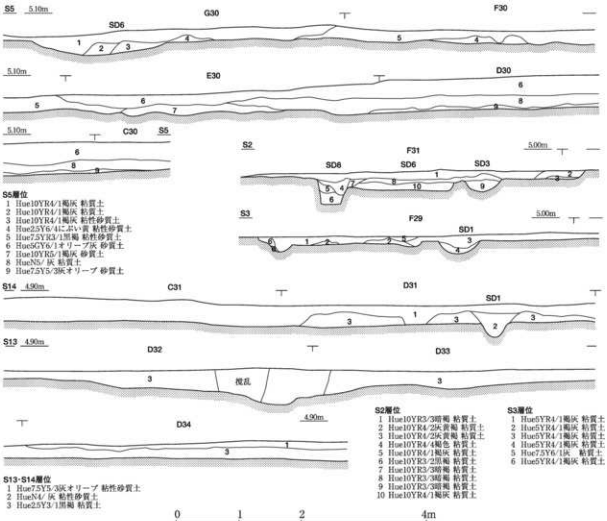
第29図　Ⅲ区遺構全体図（縮尺1：300）



第30図　Ⅲ区SK1~3（縮尺1：40）



第31図 Ⅲ区SK4~6、SB16（P1~5）、S4・6~9・11（縮尺1：60）、S1、SD5（X002~4）、G34X005（縮尺1：40）



第32図　Ⅲ区S2・3・5・13・14（縮尺1：60）

第1表　主要道構一覧表

Ⅰ区	グリット	規模（m）	堆積土	遺　物	時期	備　考	挿図	図版
SH1	F11	長軸　4.70 短軸　2.70 深さ　0.25	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N70°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の竪穴住居である。形状は長方形である。北西側に出入口を有す。壁溝がめぐる。南西側の壁溝はSK8～10に切られてる。	9	**第4 1**
SB1	E11	長軸　4.30 短軸　2.00 深さ　0.50	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N90°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の掘立柱建物である。形状は長方形で床面は平照である。桁行1間、梁行1間。	9	**第4 2**
SB2	E12～14 D12～14	長軸　10.20 短軸　5.40 深さ　1.00	茶褐色 粘土	P2から須恵器杯B蓋107	奈良～ 平安時代	N23°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む大型の掘立柱建物である。形状は長方形で床面は平照である。桁行3間、梁行2間。	10	**第4 3**
SB3	C10 D10	長軸　9.00 短軸　6.00 深さ　0.50	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N33°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む大型の掘立柱建物である。Ⅱ区で柱列を確認することができた。形状は長方形で床面は平照である。桁行4間、梁行3間。	11	**第4 4 第8 1**
SB4	D10 D11	長軸　5.00 短軸　3.00 深さ　0.50	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N33°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の掘立柱建物である。Ⅱ区では束柱列は確認できなかった。形状は長方形で床面は平照である。桁行2 間、梁行1間。	—	**第4 5**
SB5	E10 E11	長軸　5.30 短軸　5.00 深さ　0.45	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N23°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の掘立柱建物である。形状は方形で床面は平照である。桁行2 間、梁行2間。	12	**第4 6**
SB6	F7・8 G7・8	長軸　3.60 短軸　3.30 深さ　1.00	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N15°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の掘立柱建物である。形状は方形で床面は平照である。桁行2 間、梁行2間。	13	**第5 1**
SB7	E6・7 F6・7	長軸　4.20 短軸　4.00 深さ　0.40	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N75°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の掘立柱建物である。形状は方形で床面は平照である。桁行3 間、梁行2間。	14	**第5 2**
SB8	G15・16	長軸　5.60 短軸　(3.50) 深さ　0.60	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N10°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む掘立柱建物である。形状は長方形もしくは方形で、床面は平照である。全体の規模は不明だが、桁行3 間以上、梁行2間以上。	13	**第5 3**
SB9	D16・17 E16・17	長軸　7.40 短軸　4.80 深さ　0.60	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N2°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む中型の掘立柱建物である。形状は長方形で床面は平照である。束辺の柱列に立て直しの柱列が重なる。桁行4 間、梁行2間。SB10と重なる。	15	**第5 4**
SB10	D16・17 E16・17	長軸　7.60 短軸　5.60 深さ　1.00	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N5°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む中型の掘立柱建物である。形状は長方形で床面は平照である。桁行4間、梁行3間。SB9と重なる。	16	**第5 4**
SB11	G5・6	長軸　3.30 短軸　3.00 深さ　0.50	茶褐色 粘土		奈良～ 平安時代	N40°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の掘立柱建物である。形状は方形で床面は平照である。桁行1間、梁行1間。	17	—
SK122	F20	長軸　1.40 短軸　1.10 深さ　0.40	暗茶褐色 粘質土	須恵器杯B蓋112	奈良～ 平安時代	黄灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は長楕円形で底面はスリバチ状である。	18	**第5 7**
SL1	F19	長軸　4.80 短軸　3.20 深さ　0.40	暗茶褐色 粘質土	須恵器杯A116・117・119、土師器甕127・128・134	奈良～ 平安時代	黄灰色砂質土の地山を掘り込む大型土坑である。形状は長楕円形で底面は平照である。SW2が切る。	18	**第5 5**
SL2	F19	長軸　2.00 短軸　1.80 深さ　0.90	暗茶褐色 粘質土	須恵器短頸壺蓋109 須恵器杯B110 須恵器杯A114・115。	奈良～ 平安時代	黄灰色砂質土の地山を掘り込む大型土坑である。形状は長楕円形で底面は平照である。	18	**第5 7**
SW1 (SL3)	E19 F19	長軸　2.85 短軸　2.70 深さ　2.15	茶褐色 粘質土	須恵器杯B蓋106 須恵器壺120 須恵器台付長頸瓶122	奈良～ 平安時代	黄灰色砂質土の地山を掘り込む井戸である。形状は円形である。一辺1.25m規模の井桁を検出した。井桁は長さ1.25m、幅15cm、厚さ2cmの板材に切り込みをいれて蒸籠状に組み、それを9～10段重ねて立てていた。井桁内部には3枚の井桁が立てた状態で廃棄されていた。	19	**第6 1・2**
SW2	F18	長軸　2.50 短軸　1.50 深さ　1.00	茶褐色 粘質土		奈良～ 平安時代	黄灰色砂質土の地山を掘り込む井戸である。形状は不整楕円形である。周辺を大きく漏斗状の掘り込みながらも、途中で掘削を止めている。	18	**第5 5**
SD5	E1・2 D2	長軸　1.30 短軸　0.20 深さ　0.85	暗茶褐色 粘質土	須恵器台付長頸瓶121	奈良～ 平安時代	N65°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む断面漏斗状の溝である。Ⅱ区SD6と同じ溝である。	19	—

Ⅱ区	グリット	規模（m）	堆積土	遺　物	時期	備　考	挿図	図版
X001 遺物群	C11	長軸　－ 短軸　－ 深さ　－	暗灰色 粘土	土器片小量出土。	弥生時代 後期	SB8南西隅に位置し、包含層に含まれていた。黄灰色砂質土の地山上から10cm上の位置で検出。甕2個体分の土器がほぼ垂直方向に半分に割られ、一方は外面を上に、一方は内面を上に向けて検出された。	21	**第7 1**
P30 X002 遺物群	D9	長軸　－ 短軸　－ 深さ　－	暗灰色 粘土	土器片少量出土。	弥生時代 中期	D9P30の上面に位置し、包含層に含まれていた。黄灰色砂質土の地山上10cmの位置で検出。甕1個体分の土器が倒れて圧壊していた。	21	—

Ⅱ区	グリット	規模（m）		堆積土	遺　物	時期	備　考	挿図	図版
SD6 上面 X004 遺物群	C2・3 D2・3	長軸	－	暗灰色 粘土	土器片多量に出土。遺物採集番号No1～4。土師器奥160	奈良～平安時代	SD6の上面に位置し、包含層に含まれていた。SD6検出面である黄灰色砂質土の地山上から5cm上の位置で検出。土器が纏片となって散乱していた。	21	第7 2
		短軸	－						
		深さ	－						
X005 遺物群	C1	長軸	－	暗灰色 粘質土	土器片少量出土。	奈良～平安時代	SD6より7m北側に離れて位置し、包含層に含まれていた。黄灰色砂質土の地山上から6cm上の位置で検出。	21	—
		短軸	－						
		深さ	－						
SD6 上面 X006 遺物群	C3	長軸	－	暗灰色 粘質土	須恵器片大量出土。遺物採集番号No1～9、No10は集土器の甕である。	奈良～平安時代	SD6の直上面に位置し、包含層に含まれていた。SD6検出面である黄灰色砂質土の地山上から5～10cm上の位置で検出。須恵器の大甕の破片が大量に散乱していた。その他、杯身、杯蓋、平瓶を検出	21	第7 3・4・7
		短軸	－						
		深さ	－						
SB12	C11・12 B11・12	長軸	6.50	暗灰色 粘質土	東辺柱列P21・5,西辺柱列P15・14・13・2,棟持柱P6から土器片出土。	奈良～平安時代	N15°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の掘立柱建物である。形状は長方形で床面は平坦である。桁行4間、梁行2間。Ⅱ区旧SB8に相当する。	22	第8 2
		短軸	4.30						
		深さ	0.60						
SB13	A15・16 B15・16	長軸	8.00	暗灰色 粘質土	西辺柱列P45・69・53・52・51,北辺柱列P44,南辺柱列P55・49から土器片出土	奈良～平安時代	N25°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む中型の掘立柱建物である。形状は長方形で床面は平坦である。桁行4間、梁行3間。Ⅱ区旧SB11に相当する。	23	第8 3
		短軸	5.00						
		深さ	0.60						
SB14	C15 B15	長軸	5.00	暗灰色 粘質土	東辺柱列P71・72・56,西辺柱列67・73・65から土器片出土。	奈良～平安時代	N30°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の掘立柱建物である。形状は長方形で床面は平坦である。桁行2間、梁行1間。Ⅱ区旧SB12に相当する。	23	第8 3
		短軸	3.20						
		深さ	0.40						
SB15	C8・9	長軸	3.90	暗灰色 粘質土	東辺柱列P71・72・56,西辺柱列67・73・66から土器片出土。	奈良～平安時代	N35°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む小型の掘立柱建物である。形状は長方形で床面は平坦である。桁行1間、梁行1間。SK3に切られている。	24	第8 4
		短軸	2.50						
		深さ	0.50						
SK1	B9	長軸	2.40	褐灰色 粘性 砂質土	土器片わずかに出土。遺物採集番号G1～3,須恵器杯B蓋144,須恵器杯A155	奈良～平安時代	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形で底面は平坦である。SK2を切る。	24	第8 4
		短軸	2.00						
		深さ	0.40						
SK2	C9	長軸	3.00	褐灰色 粘性 砂質土	土器片わずかに出土。遺物採集番号G4～5,須恵器杯B蓋144,土師器椀A158	奈良～平安時代	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形で底面は平坦である。	24	第8 4
		短軸	2.40						
		深さ	0.40						
SK3	C8	長軸	2.00	褐灰色 粘性 砂質土	土器片わずかに出土。		黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い土坑である。形状は不整円形で底面は平坦である。	24	第8 5
		短軸	1.80						
		深さ	0.15						
SK4	C8	長軸	2.30	褐灰色 粘性 砂質土	土器片わずかに出土。弥生土器甕163	弥生時代中期	黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い土坑である。形状は楕円形で底面は平坦である。	24	第8 6
		短軸	1.30						
		深さ	0.25						
SK5	B8	長軸	1.70	褐灰色 粘性 砂質土	土器片わずかに出土。	奈良～平安時代	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形で底面はスリバチ状である。	24	—
		短軸	1.45						
		深さ	0.60						
SK6	D10	長軸	3.15	青灰色 砂質土	土器片多く出土。甕が多い。弥生土器甕166	弥生時代中期	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。SX1によって上部削られている。形状は不整楕円形で底面は平坦である。土坑墓と考えられる。	25	第9 1・2
		短軸	1.95						
		深さ	0.60						
SK7	C10	長軸	2.60	青灰色 砂質土	土器片わずかに出土。	弥生時代中期	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形で底面は平坦である。埋積土はSK6と同一であり、土坑墓と考えられる。	25	第9 1
		短軸	0.90						
		深さ	0.50						
SK8	B14	長軸	1.70	灰褐色 粘質土	土器片わずかに出土。		黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い土坑である。形状は不整円形で底面は平坦である。	—	—
		短軸	1.30						
		深さ	0.20						
SK9	A14・15	長軸	2.10	褐灰色 粘質土	土器片わずかに出土。		黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形で底面は平坦である。	25	—
		短軸	1.00						
		深さ	0.65						
SK10	A16 B16	長軸	2.10	灰黄褐色 粘質土	土器片わずかに出土。	奈良～平安時代	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形で底面は平坦である。SK13、SB13東辺柱列を切る。	25	—
		短軸	1.80						
		深さ	0.30						
SK11	B16	長軸	1.10	灰黄褐色 粘質土	土器片わずかに出土。	奈良～平安時代	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形で底面は凹凸がある。SB14東辺柱列を切る。	25	—
		短軸	1.00						
		深さ	0.40						
SK12	C15	長軸	1.30	褐灰色 粘質土	土器片わずかに出土。		黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い土坑である。形状は不整円形で底面は凹凸がある。	26	—
		短軸	1.10						
		深さ	0.15						
SK13	B16	長軸	－	灰黄褐色 粘質土	土器片わずかに出土。	奈良～平安時代	黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い土坑である。形状は不明であり、底面は平坦である。SK10・11に切られる。	25	—
		短軸	－						
		深さ	0.05						
SK14	C15 D15	長軸	2.00	青灰色 粘質土	土器片わずかに出土。	奈良～平安時代	黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い土坑である。形状は不定形であり、底面は凹凸がある。	26	—
		短軸	1.00						
		深さ	0.20						

Ⅱ区	グリット	規模（m）	堆積土	遺　物	時期	備　考	挿図	図版
SK15	C11 D12	長軸　2.10 短軸　1.10 深さ　0.30	灰色 粘質土	土器片出土。	奈良～ 平安時代	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不定楕円形であり、底面は平坦である。	26	第10 1
SK16	A22 B22	長軸　2.70 短軸　1.60 深さ　0.40	褐灰色 粘質土	土器片わずかに出土。		黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不定楕円形であり、底面は平坦である。	26	—
SK17	A22 B22	長軸　2.00 短軸　0.90 深さ　0.15	にぶい 黄褐色 粘性砂質土	土器片わずかに出土。		黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不定楕円形であり、底面は平坦である。SK16を切っている。	26	—
SK18	A23	長軸　1.90 短軸　1.50 深さ　0.15	にぶい 黄褐色 粘性砂質土	土器片わずかに出土。		黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い土坑である。形状は不定楕円形であり、底面は平坦である。	—	—
SK19	B23	長軸　1.95 短軸　0.90 深さ　0.65	暗青灰色 粘質土	土器片わずかに出土。	弥生時代 中期	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不定楕円形であり、底面は平坦である。SK20を切る。土壙墓と考えられる。	26	第9 4
SK20	B23 C23	長軸　4.50 短軸　1.10 深さ　0.45	黒褐色 粘質土	土器片多く出土。 弥生土器壺161 弥生土器甕165	弥生時代 中期	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不定長方形であり、底面は平坦である。土壙墓と考えられる。	26	第9 3･4
SK21	F23 G23	長軸　5.80 短軸　2.10 深さ　0.35	暗赤灰色 粘質土	土器片わずかに出土。		黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不定形であり、底面は平坦である。	27	第10 2
SK22	C4	長軸　3.20 短軸　2.10 深さ　0.80	オリーブ 黒色粘性 砂質土	土器片わずかに出土。弥生土器無頸壺167	弥生時代 中期	黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不定楕円形であり、底面は凹凸がある。	27	—
SD 1	C12 D12	長軸　1.40 短軸　0.30 深さ　0.95	暗灰色 粘土	土器片わずかに出土。	平安時代	N80°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。断面はV字形である。。区に3mほど伸びる。P43に切られる。	27	—
SD 2	A12 B12･13	長軸　1.40 短軸　1.00 深さ　0.2	暗茶灰色 粘性 砂質土	土器片わずかに出土。	奈良～ 平安時代	N40°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。SD5と接続して L字状に曲がる区画溝と考えられる。	28	—
SD 4	A9･10 B9･10	長軸　2.30 短軸　2.00 深さ　0.20	暗赤灰色 粘性 砂質土	土器片わずかに出土。 須恵器杯B蓋142・146 須恵器杯B148 須恵器杯A154 須恵器杯B157 土師器皿A153	奈良～ 平安時代	N50°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。	27	—
SD 5	A14 B13･14	長軸　1.10 短軸　0.40 深さ　0.45	褐灰色 粘性 砂質土	土器片わずか4点出土。 須恵器杯B蓋143 須恵器杯A150・151	奈良～ 平安時代	N50°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。断面はコの字形である。SD2と接続して L字状に曲がる区画溝と考えられる。	28	第9 5
SD 6	D3 C3･4	長軸　0.70 短軸　0.15 深さ　0.80	暗青灰色 粘質土	土器片出土。 須恵器杯B蓋145 須恵器杯B149 須恵器杯A152 須恵器平瓶159	奈良～ 平安時代	N45°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。断面はV字形である。区画溝と考えられる。上面でX004・006遺物群が検出されている。	28	第9 6 第10 3
SD 8	D11･12	長軸　2.40 短軸　1.20 深さ　0.25	暗青灰色 粘質土	土器片出土。 須恵器杯B149	奈良～ 平安時代	N75°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。	28	第10 4
SD 9	B2･3	長軸　1.30 短軸　0.60 深さ　0.55	褐灰色 粘性 砂質土	土器片出土。遺物採集番号No1～6。 弥生土器壺162	弥生時代 中期	N15°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む溝である。断面は逆台形である。東側は自然河川によって破壊されている。実体は5基以上の土坑が重複したものと考えられる。	28	第10 5

Ⅱ区	グリット	規模（m）	堆積土	遺　物	時期	備　考	挿図	図版
SB16	C26	長軸　4.20 短軸　1.80 深さ　0.50	黒褐色 粘質土	土器片出土。	奈良～ 平安時代	N30°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む掘立柱建物と考えられる。P1～5で構成される。形状は長方形であり、床面は平坦である。全体の規模は不明だが、桁行3 間以上、梁行1間確認。	31	第13 1
SK1	E24	長軸　4.60 短軸　1.70 深さ　0.50	にぶい 黄褐色 粘質土	土器片出土。	弥生時代 中期	N70°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑墓である。形状は不整長方形である。底面へ平坦である。	30	第12 1･2
SK2	E27･28	長軸　3.20 短軸　1.10 深さ　0.75	褐灰色 粘質土	土器片出土。上・中・下層で炭化した樹材が出土。	弥生時代 中期	N50°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑墓である。形状は不整長方形である。底面へ平坦である。	30	第12 3･4
SK3	G26 H26	長軸　1.90 短軸　0.50 深さ　0.35	暗褐色 粘質土		弥生時代 中期	N60°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む小型の土坑墓である。形状は不整長方形である。底面へ平坦である。	30	第12 5

Ⅱ区	グリット	規模（m）	堆積土	遺　物	時期	備　考	挿図	図版
SK4	C27	長軸 2.50 短軸 1.90 深さ 0.30	灰色 粘質土			黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。底面は平坦である。	31	—
SK5	B25	長軸 3.30 短軸 1.10 深さ 0.35	灰黄褐色 粘性 砂質土	土器片出土。	弥生時代 中期	N30°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑墓である。形状は不整長方形である。底面ペル平坦である。	31	第12 5
SK6	A25 B25	長軸 1.60 短軸 1.10 深さ 0.40	ｵﾘｰﾌﾞ灰 粘性 砂質土			黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不円形である。底面は平坦である。	31	第12 6
SD 5 X002	D28	長軸 － 短軸 － 深さ －		土器片出土。 須恵器杯A150・151	奈良～ 平安時代	SD5内で出土。須恵器杯、皿、土師器甕が底面から10cm上の位置で検出された。	31	第13 2
SD 1	F29・30 G28	長軸 1.00 短軸 0.70 深さ 0.25	ｵﾘｰﾌﾞ 黄色 粘性 砂質土	土器片わずかに出土。	奈良～ 平安時代	N45°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。断面は逆台形である。	31	—
SD 2	F30・31	長軸 0.60 短軸 0.30 深さ 0.20	暗褐色 粘質土	土器片わずかに出土。	奈良～ 平安時代	N55°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。断面は逆台形である。	—	—
SD 3	F31	長軸 0.40 短軸 0.25 深さ 0.20	暗褐色 粘質土	土器片わずかに出土。	奈良～ 平安時代	N45°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。断面は半円形である。北西側でSD6と接続する。	32	—
SD5	D28 E26・27 F25・26	長軸 0.60 短軸 0.40 深さ 0.40	にぶい黄色 粘性砂質土	土器片わずかに出土。	奈良～ 平安時代	N45°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。断面は逆台形である。溝内よりX002～005の遺物群を検出。	31	—
SD 5 X003 遺物群	D28	長軸 － 短軸 － 深さ －		土器片出土。 土師器甕160	奈良～ 平安時代	SD5内で出土。土師器は上層に含まれ、底面から25cm上の位置で検出された。	31	第13 3
SD 5 X004 遺物群	D28	長軸 － 短軸 － 深さ －		土器片出土。 土師器甕160	平安時代	SD5内で出土。土師器は上層に含まれ、底面から25cm上の位置で検出された。	31	第13 3
X005 遺物群	G34	長軸 － 短軸 － 深さ －		土器片出土。	弥生時代 後期	土器は包含層に含まれ、地山面から30cm上の位置で検出された。	31	第13 4
SD6 X006 遺物群	G30・31 H29	長軸 1.10 短軸 0.90 深さ 0.30	褐灰色 粘質土	土器片わずかに出土。 須恵器椀B149	奈良～ 平安時代	N45°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。断面はスリバチ状である。南東側でSD3・8が接続する。	32	第13 3
SD8	E33 F31・32	長軸 0.40 短軸 0.30 深さ 0.50	黒褐色 粘質土	土器片わずかに出土。 須恵器椀B148	奈良～ 平安時代	N45°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。断面は逆台形である。北西側でSD6と接続する。	32	—
SD9	G32 H32	長軸 1.20 短軸 0.80 深さ 0.20	黒褐色 粘質土	土器片わずかに出土。	奈良～ 平安時代	N90°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。断面は逆台形であり段差をもつ。	31	—
SD10	E25・26 C26・27 D28～30 E30・31	長軸 0.45 短軸 0.20 深さ 0.60	褐灰色 粘質土	土器片わずかに出土。	奈良～ 平安時代	N20°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む深い溝である。断面はU字形である。Ⅱ区SD10に接続する溝であり、区画溝と考えられる。	31	—

第4章　遺　　物

遺物は、Ⅰ~Ⅲ区を通して、奈良~平安時代(8世紀代)の須恵器・土師器が主体となり、次いで弥生時代中・後期の土器が出土した。土器は全体的に細片が多く、図化し得たものは少ない。土器以外の遺物としては、弥生時代の玉作り関連遺物、石器、不明石製品などが少量確認された。

土器については、図化できたもの可能な限り掲載し、包含層出土の土器については、調査区別に特徴をもつ個体をあげる。遺構出土の土器については、調査区別に、主に8世紀代の土器を含む遺構と、弥生時代の土器を含む遺構をとりあげて、各個体の特徴を述べる。

土器の縮尺は、1/4で統一し、その他の遺物の縮尺は、第39図で2/3、第40図で1/3で掲載した。挿図中の遺物番号は、本文や表、写真図版において共通である。出土遺物の詳細は、土器については第2表、その他の遺物については第3表を参照されたい。以下、概要を述べる。

第1節　土　器（図版第14~20図、第33~38図、第2表）

・包含層出土の土器

Ⅰ区包含層出土の須恵器(第33図、図版14・15)

Ⅰ区包含層出土の須恵器は、杯B蓋1~12、杯B13~20、高杯21、杯A22~32、盤A33、広口瓶34、鉢36、長頸瓶37、広口鉢38、広口壺35・39を図化した。

杯B蓋は、口径15.4~16.0cm、器高2.2~3.9cmを測り、ツマミは扁平擬宝珠である。口唇部は短く下方へ屈曲し、口唇部に返りをもつものはない。天井部の調整はヘラ切り後、ヘラケズリをしているものが多い。杯Bは、小型法量(口径13cm)の13、中型法量(口径14.2cm)の14・18、大型法量(口径17.4cm)の17がある。高台接地面は、内側のみでハの字踏ん張り、口縁部はやや丸みをもって立ち上がるか、もしくは、直線的に外方へ開く。底部はヘラケズリをしている。

杯Aは、小型法量であり、22~31までは口径10.8~14.0cm、器高3.0~3.8cmを測る。口縁部は、中位から外反して開くもの、底部から直線的に立ち上がるものがある。底部は、ヘラ切り後ナデで調整している。盤A33は口径16.4cm、器高2.7cmを測り、底部はヘラ切り後ナデで調整している。広口瓶34は、37のように肩が張る胴部をもつが、頸部径が大きいため、広口瓶とした。広口壺35・39は口唇部の形状が同じであり、胴部外面はタタキ、胴部中位内面は同心円文をナデ消している。

Ⅱ・Ⅲ区包含層出土の須恵器(第34図、図版15・16)

Ⅱ・Ⅲ区包含層出土の須恵器は、盤B蓋40、杯B41~43、杯A44~63、高杯64、脚付長頸壺65、長頸瓶66~68、短頸壺69・70、鉢71・72、横瓶73を図化した。

盤B蓋40は、口径19.3cmを測り、口唇部は短く外方へ反る。杯B41・43は、中型法量で口径15.5~16.1cm、器高3.7~4.0cmを測り、口縁部は外方へ直線的に立ち上がり、高台接地面は内側のみでハの字に踏ん張る。杯Aは小型法量であり、46~51までは口径11.9~12.5cm、器高3.1~3.6cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がる。47・49・53・55・56・58・62・63は、底がやや深く、安定しない器形である。底部はヘラ切り後未調整のものと、ヘラ切り後ナデで調整しているものがある。高杯64は、盤B蓋40のような蓋を逆さにして杯部としていた。底部には筒状の脚部が付くと考えられる。

65は長頸壺、66~69は長頸瓶である。66は、頸部から胴部にかけて外面に数条の平行沈線が入れら

れ、脚台を有している。

66・67は、頸部に2条の沈線が入る長頸瓶である。68は、肩が大きく張る扁球状の胴部に脚が付く。肩には2条1組の平行沈線で区画され、列点簾状文や櫛描波状文が施される。69・70は短頸壺であり、70の胴部下位はヘラケズリで調整されている。71は、双耳が付く鉢であり、胴部中位に3条の平行沈線をもつ。72は、広口鉢であり、胴部下位に2つの角状の把手のをもつ。73の横瓶は、胴部外面はタタキ後全体をカキメで調整してある。両小口面内面に粘土板の閉塞痕は確認できなかった。

Ⅰ区包含層出土の土師器(第35図、図版16・17)

Ⅰ~Ⅲ区包含層出土の土師器は、杯A74~83、椀84~86、高台87、甕88~94、盤A95を図化した。

杯A77~81・83は、中型法量であり、口径13.2~14.0cm、器高2.4~3.8cmを測る。口縁部内外面はヨコナデで調整している。杯A82・83は赤彩され、83の内面は朱書きの暗文が施されている。椀84は金属器を模した半球形の形状をとる。

甕(88~90)は小型法量の甕である。口縁部はくの字に開き、内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデで調整されている。甕(91~93)は中型法量の甕であり、肩が張らず、径の小さな底部が付く器形である。91は口唇部が上方へ立ち上がり、92は口唇部が下方へ面取りされている。93は口唇部が厚く面取りされ、胴部外面はハケ、内面はヘラケズリで調整されている。94は、大型法量の長胴甕であり、口径22.8cmを測る。口縁部は強いヨコナデ、内外面はハケ後ナデで調整されている。

Ⅱ・Ⅲ区包含層出土の土師器・弥生土器(第35図、図版17、第1表)

Ⅰ~Ⅲ区包含層出土の土師器は、杯A96~99、盤A95、甕102・103を図化した。杯A96~99は大型法量であり、口径18.1~18.9cm、器高3.6~4.5cmを測る。口縁部は短く緩やかに内湾し、底部は平坦である。内外面はヨコナデで調整している。甕102は、口縁部がくの字に開き、胴部外面はハケ、胴部内面はヘラケズリで調整されている。103の口縁部は、短く屈曲し、胴部の肩が大きく張る器形である。100・101は弥生時代中期の高杯である。

・遺構出土の土器

Ⅰ区遺構出土の土器(第36・37図、図版17・18、第1表)

Ⅰ区遺構出土の土器は、須恵器(杯B蓋104~108、短頸壺蓋109、杯B110~113、杯A114~119、壺120、長頸瓶121・122、広口壺123、甕124・125)と、土師器(甕127・130~134)、弥生土器(甕127・130~134)を図化した。

SB2P2の遺物として、須恵器(杯B蓋107)がある。口径15.8cmを測り、口唇部は下方へ屈曲する。ツマミは欠損しているが、器高4.0cm以上あったと推定される。

SK1の遺物として、須恵器(甕125)がある。最大径は40.2cmを測り、外面はタタキ後カキメが施されている。胴部中位に2つの環状把手をもつ。

SK117の遺物として、須恵器(杯B蓋108、杯A118、広口壺123)がある。杯A118は口径13.0cmを測り、口縁部が直線的に立ち上がり、底部はヘラ切り後ナデで調整されている。広口壺123は、口径11.4cm、器高19.1cmを測る。口唇部は外方へ肥厚する。外面は回転ナデで調整されている。

SK123の遺物として、土師器(甕130・131)がある。甕130・131は、口径13.3~15.2cmを測り、緩やかに外反した短い口縁部に、肩が張らない長い胴部をもつ。全体はハケ後ナデで調整している。

SL1の遺物として、須恵器(杯A116・117・119)、土師器(甕127・128・134)がある。杯A116・117は口縁部に丸みをもち、116は、口径11.4cm、器高3.2cmの小型法量を示し、117は口径13.6cm、器高3.5cm

の中型法量を示す。119は口縁部が外傾し、口径16.1cm、器高4.8cmを測る。土師器甕127は、口縁部が短く緩やかに屈曲し、胴部内外面はナデで調整されている。134は、くの字に屈曲する口縁部をもち、口径25.0cmを測る。胴部上位はハケ、中位はナデである。胴部内面はヘラケズリで調整されている。弥生土器128は、口径13.8cmの小型甕であり混入品である。

SL2の遺物として、須恵器(杯B蓋105、短頸壺蓋109、杯B110、杯A114・115)がある。杯B110は、底部が高台より膨らむ特徴から、東海系の杯Bとされるもので、県内では坂井市(旧丸岡町)瓦谷2号窯で確認されている。杯A114・115は、口径13.0cm前後、器高9.4~9.7cmを測り、口縁部は外傾し、底部は丸みをもつ。

SW1(SL3)の遺物として、須恵器(杯B蓋106、壺120、長頸瓶122)がある。長頸瓶122は、底部外面に放射状の刻目がある。井戸底から検出された。

P60 の遺物として、弥生土器(甕136)がある。甕136 は、口径22.8cm、器高24.3 cmを測り、口縁部は緩やかに内湾して外方へ開き、底部が窄まる器形である。口唇部に刻目文がめぐり、口縁部内面をヨコハケで調整した後、2条の波状文がめぐる。胴部は、外面上位をヨコハケ、以下はタテハケで調整されている。胴部内面上位と下位はヨコハケで調整されている。

P62 の遺物として、弥生土器(壺139)がある。壺139 は、口径15.0cm、器高33.9 cmを測り、口縁部は外反して開き、胴部中位が大きく膨らみ、底部が窄まる器形である。胴部上位に4条1組の沈線が2組めぐり、その間に3条に鋸歯文がめぐる。胴部中位には2条の連続刻目文がめぐる。胴部外面はタテハケ後ナデ、胴部上位内面はタテ方向のヘラナデで調整されている。

SK98の遺物として、弥生土器(甕128・135)がある。甕128の口唇部は外方へ折れて端面となり、胴部外面はハケ、内面はヘラケズリで調整されている。底部外面にもハケが残る。甕135の口縁部は鋭く屈曲し、口唇部を面取して端面としている。口縁部内面はヨコナデ、外面はハケで調整されている。胴部上位は張り、底部は窄まる。

SK132の遺物として、弥生土器(甕137・138)がある。甕137は、口径20.4cm、器高24.7cmを測り、口縁部は緩やかに外反し、底部が窄まる器形である。口唇部に刻目文、胴部上位に櫛描列点文がめぐる。外面と口縁部内面はハケ、胴部内面はナデで調整されている。甕138は、口径18.1cm、器高19.5cmと推定される。胴部外面はハケで調整されている。

Ⅱ区遺構出土の土器(第38図、図版19・20、第1表)

Ⅱ区遺構出土の土器は、須恵器(杯B蓋140~147、杯A152~155、杯B157、平瓶159)、土師器(皿A153・椀A156・杯A158・壺161)、弥生土器(壺162・甕163~166・無頸壺167)を図化できた。

SD4の遺物として、須恵器(杯B蓋142・146、杯B148・157、杯A154)、土師器(杯A153・158)がある。杯B蓋142・146は口径15.6~17.5cm、器高3.4~3.8cmを測る。142は口唇部が丸く、器高が高い。146は口唇部が下方へ屈曲し、扁平である。

杯B148は、口径16.4cm、器高4.3cmを測り、高台接地面は内側でハの字に踏ん張る。157は、高台が欠損しており、口径15.3cm、器高3.8cmを測り、底部は回転ヘラケズリで調整されている。杯A154 は、口径11.4cm、器高3.9cmを測り、底部はヘラ切り後ナデで調整されている。

SD6の遺物は、正確には、SD6上面X006遺物群のものである。これらは包含層中に含まれながらもSD6に沿って検出され、遺構の遺物として扱った。遺物の大半は、須恵器の大甕であったが、復元可能な個体がないため、大甕以外の須恵器(杯B蓋145・147、杯A152、平瓶159)をあげる。